J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 8, No. 1（2024）183～211

A. A. ミルン『名誉ある平和』＜5＞

訳：吉　村　　圭

A. A. Milne *Peace with Honour* (5)

Translation: Kei YOSHIMURA

要　　旨

本稿では、A. A. ミルン（Alan Alexander Milne）が前世紀の戦間期に著した『名誉ある平和』（*Peace with Honour*, 1934）の翻訳を行う。ミルンは『くまのプーさん』（*Winnie-the-Pooh*, 1926）を生んだ児童文学作家として有名であるが、その牧歌的な作風とは対照的に、前世紀の２つの世界大戦の時代を生き、その時代に翻弄された作家である。第一次世界大戦においては自身が平和主義者であることを自覚しながらも陸軍に志願し、通信将校として激戦地ソンムでの塹壕戦を経験している。そして現代戦争の惨状を直に経験したミルンは、次に起きる戦争が「アルマゲドン」（世界に破滅をもたらす戦争）になると考え、その地獄のようなできごとが二度と繰り返されないよう平和の重要性を訴える執筆活動を積極的に行った。本書は、世界が第二次世界大戦へと向かう中、ミルンが警鐘を鳴らすべく書いた戦争と平和に関する論考である。その中では世界の未来から戦争を無くすための極めて平和主義的なビジョンが示されている。作家ミルンの思想が深く表された著書であり、彼の著作を理解する上では非常に重要である。本稿では、第14章「仲裁」（Arbitration）から最終章（第18章）の「女性と子どもたちを第一に」（Women and Children First）までの邦訳を掲載する。

１．訳者解題

本稿では、A. A. ミルン（Alan Alexander Milne）が前世紀の戦間期に著した『名誉ある平和』（*Peace with Honour*, 1934）の14章から最終章である第18章までの翻訳を行う。(1) ミルンは『くまのプーさん』（*Winnie-the-Pooh*, 1926）を生んだ児童文学作家として有名であり、一般的にのどかで牧歌的な作風で広く知られる。しかしミルンの伝記的背景に目を向ければ、前世紀に行われた２つの世界大戦の時代を生き、戦争に翻弄された生涯を歩んでいることがわかる。とりわけ一次世界大戦（以下「大戦」）では陸軍に志願し、激戦地ソンムでの塹壕戦を経験している。自伝『今からでは遅すぎる』（*It's Too Late Now*, 1939）の大戦時代を語る章の冒頭において、ミルンは当時の心境を次のように述べている――“I should like to put asterisks here, and then write 'It was in 1919 that I found myself once again a civilian.' For it makes me almost physically sick to think of that nightmare of mental and moral degradation, the war”（211）。大戦での経験は、戦後20年が過ぎた当時であっても、「考えるだけで体がおかしくなる」ほどのショックと絶望感を

ミルンに与えていたのである。

ミルンは平和主義者として、子どもたちが生きる未来から戦争が永久になくなることを願っていた。ミルンのこのような平和への姿勢は大戦前から一貫しており、彼が大戦で陸軍に志願したのもその戦争が「戦争を終わらせるための戦争」だと信じたためだった（*It's Too Late Now* 211）。つまりミルンは自身が平和主義者であることを自覚しながら、未来の平和のために戦争を戦ったのである。しかし大戦は最後の戦争となることはなく、ミルンが平和を願った「未来」は次の戦争へと向かっているところだった。『名誉ある平和』はまさにその時代に、次の戦争を食い止めるべく書かれた平和論である。

本書でミルンが目指すのは、全世界から未来永劫戦争をなくす「普遍的平和」（Universal Peace）の実現である。ミルンはそのために不可欠な条件として、各国が攻撃だけでなく防衛のための武装の放棄を行うことを挙げている。そして本書では一貫して、愛国主義がその障壁となる思想として繰り返し批判されている。(2)

14章「仲裁」（Arbitration）では、12章で言及された「中立の法廷」（Neutral Court）による「普遍的仲裁」（Universal Arbitration）に関する議論が行われる。ミルンは12章において、攻撃だけでなく防衛のための軍事力も放棄されなければ真の平和は実現しえないという、本書における重要な考えを示している。そして軍事力に代わる争いの調停手段として、「中立の法廷」による「普遍的仲裁」にゆだねるよう提案している（133）。(3) 14章ではその提案に対して起こりうる反論を想定しながら、その「仲裁」を軍事力の使用の代替行為として定義していく。

15章「平和会議のための覚書」（Notes for a Peace Conference）では、世界がたどるべき平和の実現へ向けての方策が提案されている。その中で特徴的なのは、「譲歩」（concession）の概念の提案だろう。ミルンの考えによれば、現在の状況について満足し、ただ世界が平和になることを望む国（contented nations）がある一方、現状に不満を募らせその状況を戦争によって解決しようする国（discontented nations）がある。そして“discontented nations”に戦争という目標物を奪い取るための伝統的な手段を取らせないためには、“contented nations”が自国の領土や所有物を譲歩することで、その不満を解消できるよう努めなければならないというものである（168）。つまり戦争によって領土などの目標物を奪い合うのではなく、話し合いや仲裁によってその目標物を手に入れる／差し出すことが提案されているのである。あまりにも平和主義的な提案であるといえるが、ミルンは次に起きる戦争が「アルマゲドン」（世界に破滅をもたらす戦争）となることを確信していた。そのため15章で「仲裁」に対して言及された表現を借りれば、その「譲歩」とは「戦争という究極に不快なものへの代替行為」（146）として提案されたものと思われる。ミルンにとって普遍的平和の実現は多くの犠牲を必要とするのである（147）。そしてミルンは「普遍的平和」を実現するために、誰かが裏切るかもしれないという「背信」（Bad Faith）を前提とするのではなく、「忠誠」（Good Faith）を前提とした他国への信頼によって成り立つ国際秩序が必要であると訴えている（171）。

16章「愛国主義と誓約」（Patriotism and Pledges）では、ミルンが本書で繰り返し述べてきた愛国主義への批判と、各国の代表者たちによる「誓約」（Pledge）についての議論が行われる。ここで述べられる誓約とは、12章で述べられた「攻撃と防御両方の戦争の放棄」への誓いであり、14章で議論された国家間の争いの調停を「仲裁」にゆだねることへの誓いである。つまり軍事力は攻防の目的を問わずすべて放棄し、領土の所有等で国家間の衝突が生じた場合は「中立の法廷」の決定にゆだねるというものである。当然この誓約による国際秩序を成立させるためには国家間の深い信頼関係が不可欠であるが、ミルンはその信頼関係の構築の障壁となるものが愛国主義だと指摘する。ミルンにとって、愛国主義とはありのままの祖国を愛する精神ではなく、国の軍事力

に対して抱かれる熱烈な関心のことである（174）。そして愛国主義は、戦争、背信と「悪の三位一体」ともいうべき関係にあるものと位置づけられている――“War *means* Patriotism. / Patriotism *means* Bad Faith. / Bad Faith *means* War”（175）。そしてミルンは、国や為政者が軍備の放棄への誓いを行うことで、軍事力への関心を意味する愛国主義を終わらせ、この三位一体を断ち切ることができると訴えている。

17章「戦争の拒否」（Refusal of War）では、「可能性」が現実に及ぼす影響について議論が行われる。つまり、他国が侵攻してくるかもしれないという可能性を認める限り、各国は防衛のための軍事力の放棄をすることはできず、その結果普遍的平和は実現しないというものである。ここで議論されるのは、本来可能性でしかないはずのものが、現実社会にネガティブな影響を与えているということである。本書で主張されるミルンが考える平和への工程は、この章で次のようにまとめられている。

> *First*: Realization that Universal Peace is a vital necessity to Europe.
> *Second*: Conditional acceptance of Peace if certain claims are satisfied.
> *Third*: Settlement of claims.
> *Fourth*: Complete renunciation both of aggression and defence. (197)

つまり普遍的平和の実現を前提とし（第1段階）、他国による領土などの所有権の主張に対する「平和の条件つき受容」をすることで（第2段階）、その他国の要求を解決（第3段階）する。その結果「軍備の完全なる放棄」（第4段階）が実現するのである。平和への誓約と忠誠が実現しているならば、他国に譲渡した領土は「世界の救済のために負ったリスク」（206）として、国際的な賞賛を受けることになる。その栄誉は国が失うことになった領土などの物質的損失よりもはるかに価値のあるものとなる。そしてあらゆる国家がこのように自己犠牲を払いながら、しかしそれによって得られる名誉を土台に作り上げられてゆく平和秩序を指して、ミルンはそれを「名誉ある平和」（Peace with Honour）と呼ぶのだろう。

最終章である18章「女性と子どもたちを第一に」（Women and Children First）では、これまで女性と子どもを優先的に守るという意味で用いられてきた“Women and Children First”という言葉が、次の戦争では彼らが最初に犠牲になるという意味に変わると述べられる。ナポレオン戦争のように軍人同士が互いの誇りをかけて戦ったような、ある種神秘的で英雄的な行為として語られる過去の戦争とは異なり、現代戦争は空爆が中心の無差別攻撃となる。その戦争では女性や子どもたちは身を守る術がない状況に置かれ、兵士は敵兵ではなく無防備な女性や子どもを殺すように強いられることになる、とミルンは警告している。そして最後に、次の戦争があるのなら、もっとも守られるべきは、政治的指導者ではなく一般市民の命であることを訴えながら、本書は結ばれる。

Ann Thwaite の伝記に引用された編集者宛の手紙の中で、ミルンは本書について次のように述べている――“You have always told me that personally you thought more of *Winnie-the-Pooh* than of any other book I have ever written. Please let me tell you that I think more of *Peace with Honour* than any book I have ever written”（381）。自身がもっとも重要な著書と評する本書において、ミルンはまさに第二次世界大戦へと向かっているさなかの世界に対し、警鐘を鳴らし続けている。そこでは、大戦の恐怖を直に経験し、子どもたちが生きる未来から戦争がなくなることを真剣に考えつづけたミルンによって、戦争そのものを終わらせるためのビジョンが示されている。第二次世界大戦はミルンが予見したような「アルマゲドン」とはならなかったが、本書の出版から90年が経過する現在もなお、世界では戦争が繰り返されている。本書で述べられるミルンのメッセージは、現代にこそ改めて広く読まれる価値があるものである。ここに邦訳を掲載することで、その一助となることを願う。

［解題注記］

(1) 本稿では『名誉ある平和』の初版（Methuen, 1934）を元に引用、翻訳を行う。

(2) ミルンが大戦の勃発直前に著した掌編「アルマゲドン」においても、愛国主義者が戦争の発端となる様子がアイロニカルに描かれている。詳細は拙著「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』：A. A. ミルンが描いた大戦前夜」で議論している（283-285）。

(3) 詳細は拙訳「A. A. ミルン『名誉ある平和』＜4＞」参照。

2．翻訳　『名誉ある平和』

14章　仲裁（Arbitration）

1

12章で私は「仲裁」に対する一般的な反論を３つ示した。可能な限り簡潔に述べると、要点は次の通りだ。

「各国は特定の問題の調停を中立の法廷にゆだねることをしないだろう。仮にゆだねたとしても、彼らがその判決の公平性に確信を抱くことはないだろう。そして彼らに不利な判決がくだされたとき、彼らは戦争の手段に訴えるだろう。」

これらの反論はしかし、仲裁に関する疑問を解決するための糸口を与えてくれるように思える。

今我々が思い出さなければならないのは、強制的な仲裁それ自体が魅力的な手段として提案されているわけではないということだ。むしろこれは戦争という究極に不快なものへの代替行為として提案されているのだ。虫歯の代わりが歯医者だ。他人からあごにメスを入れられたくはない、そもそも彼が治療をするふりをして自分を傷つけないとどうしていえるのか、という反論は、歯医者にかかることになる可能性と必要性を解消することはないのだ。私が提唱した、戦争を回避するための方策に対する軍国主義者による反論は、いつも同様の要領で行われているように思われる。すなわち普遍的平和などというものは簡単に実現でき、誰からも犠牲を求めない場合にのみ考慮する価値があるのだという考え方だ。

確かに普遍的平和は多くの犠牲を必要とする。それは、これまで習慣的に行われてきた多くの無意味な行為を犠牲にするのだ。しかし、１千万の人の命は必要としない。

2

「仲裁」への第一の反論は次のようなものだ。

A. 支配の権限を他の国家による仲裁にゆだねることは国家の尊厳に関わることだ。

英国とフランスはかつてファショダの所有を巡って争った。もし英国がノルウェイにその諍いの調停をまかせるのであれば、英国はその支配に影響を及ぼす状況の中で他国（ノルウェイ）に干渉する権利を与えることになる。しかし同様に、フランスとの戦争を選んだのであれば、英国はその支配に影響を及ぼす状況の中で他国（フランス）に干渉する権利を与えることになるのだ。英国が自身の命運を自身でコントロールするためには、１つにはノルウェイに英国の権利を確信させなければならないし、またもう一方では、フランスに英国の意思を確信させなければならないのだ。もし誰からもとがめられることなく好きなことができて、ほしいものを手に入れることができる程度まで自国の命運をコントロールできるのであれば、英国がそれを望むのは間違いない。誰だってそのほうがいいに決まっているのだ。しかし同様の所有権を主張する敵対者が現れたとき、その対抗する主張は甘んじて受け入れられなければならない。それをもう片方にとって好ましいものにするのは絶対的な基準ではなく、むしろ習慣と環境によるのだ。もし２人の政治家が自分たちの党首が誰かについて意見が分かれたとして、下院の床を使ってレスリングの試合を行うことでその問題を解決するとしたら、それは彼らの尊厳を損なうことだと彼らは考えるだろう。しかしもし２人の自由形のレスラーが新たに結成されたプロレス団体のトップが誰かで意見がわかれたとして、レスリングの試合でその諍いを解決することは、正しく、また尊厳が保たれる手段となる。むしろ彼らが尊厳を損なうと感じるのは、経済学における競争的試験による解決なのだ。

そうであれば、もしある国が所有を主張する何

かを別の国が欲しいと感じたときに、その主張を調停ではなく戦争による苦しみにゆだねようとするとき、そこに本質的な尊厳というものはなにひとつ認められない。というのも、ただ十分に強いからといって力によってものを奪うことに、本質的な尊厳などないからだ。また十分に力がないために何かを力づくで奪えなかったからといって、その尊厳がより明らかとなることもない。一方で、公正さや正義に対する客観的な判断を受け入れることを避けるために力をよりどころにするよりも、誰かの主張する正義をよりどころにすることのほうが、確かな尊厳があるように思われる。

今日、各国は財産だけでなく存在そのものにおいても国際社会に依存している。主権的な権利などというものは言葉上の価値しかなく、愛国主義者の抱く国家の独立性への誇りなどもはや称賛というより、お笑い事であることのほうが多い。誇り高きボリビア人は、自国がパラグアイとの争い[1]を治めるためにヨーロッパの下院に頼るとしたら、そのことで尊厳がけがされると感じるだろう。しかしそうしない代わりに、それはヨーロッパの軍事工場によって収められようとしているのだ。

3

B.「中立の法廷」は真の意味で中立とはなりえない．なぜなら，それは争いをしているいずれかの国家の同盟国で構成されるか，あるいは様々な国家の代表で構成されるにしても，個々人はそれぞれの国に偏った考えを持っているだろうからだ.

忘れられがちなことだが、世界はうん千年もの間、平和を土台にしてではなく、戦争を土台にして作られてきたし、いまもなおそのように作られているところだ。日用雑貨店が魚を売るべきではないということにはいくらでももっともらしい理由をつけられるが、氷がないからというのはその理由の１つにはなりえない。もし魚を売ると決めたのであれば、氷を手に入れるのはその店主の仕事なのだ。もしヨーロッパが調停を選ぶのであれば、公平な中立の法廷を作るのはヨーロッパの仕事だ。法廷の公平性というものは、大きく伝統に関わる問題だ。そしてヨーロッパのすべての国の勤務当番表にその伝統を築くことは不可能ではない。法廷で認められたある言語で考え、話すことができる、信頼のおける卓越した人物が務める中立の法廷を築くことができれば、各国がその法廷を保つことは不可能ではないのだ。そのような人物は、最初は法律顧問となり、のちに裁判官として採用されることとなるだろう。救命艇の乗組員が、国籍を問わず公平に命を救うことに誇りを持つという海の伝統と同じだ。そのため、裁判官がすべての国家に対して公平で、正義に貢献することに誇りを持つような、中立の法廷という伝統も存在しうるのだ。彼のプロフェッショナルとしての忠誠は、人としてもっとも強い忠誠なのだ。仮に彼の忠誠心が、他国より祖国に対して強く抱かれたとしても、それは相反するものではなく、むしろより強固な忠誠となるのだ。国への誇りとは、軍事力への誇りと同義ではない。すべての国の法廷の中で自国の法廷により高い名声を集めることは、国家の誇りに関わることなのだ。だからこそ、諍いを起こしているいかなる国家であっても、どこそこの国の中立の法廷から正義や共感や理解が得られるのはまず確かだという点には同意するだろう。

一日にしてそのような伝統が成立するはずはない。さらに確実に、その法廷の初期段階では不正が行われることだろう。しかしその不正は絶対的な正義とではなく、戦争の結果得られた「正義」と比較されるということを忘れてはならない。仮にサラエボでの暗殺[2]がほとんど伝統のない中立の法廷にゆだねられとしたら、オーストリアは自身に対して正義が行われていないと不平を述べただろう。しかし、オーストリアは現在のこの状況の正義に完全には満足しておらず、いっそその中立の法廷の判決のほうを好ましいと感じた可能性もある。ガラハドはテニスン卿によって、心が純粋なる彼の強さは10人分の強さに等しい[3]と評されている。いかなる国家も、十国標準主義[4]を成し遂げる兆候はない。いったん闘いが始まると、

原因となるものの純粋さなどもはやどうでもいいことだ。重要なことはあらゆる戦争では片方が負け、あらゆる平和のもとでは、負けつつある方が不正を行うことになるということなのだ。

4

C．敗訴した国家はその判決を平和的に受け入れることはないだろう.

この反論はすぐに制裁の問題を呼び起こす。それでは、制裁について考えてみよう。

私は前のほうの章[5]で、国家が名誉について語ることなど、九九の一覧表がその名誉について語るのと同じくらい理に反していることだといった。というのも国というものは政治家によって代表されるものであり、政治家とは概していかなる道徳心ともあいいれない、愛国主義者の伝統をもつものだからだ。そのことを互いに知りつくしているので、政治家は互いの言葉を受け入れるのを嫌がるのだ。その結果、国が（政治家を通して）あれやこれをするために名誉にかけて誓いをたてるとき、皆の心には「しかしあの国がそうすることで不都合になったときに誓いを破らないことをどうやって保障するのだろうか？」という考えがごく自然に浮かぶのだ。さらに、何世紀もの間、政治家とは軍事力を唯一の有効な議論手段として認めてきたため、彼らがただちに彼らの考えを別の疑問に置き換えることは当然のことだ。「あの国が誓いを守るよう*強いる*ためにどのような軍事力が必要だろうか？」

ある国がその名誉の誓いを守らせるのに必要な強制力のことを制裁と呼ぶ。

さて、もしヨーロッパが10の名誉ある国々でできており、それらのすべての国が戦争を終わらせる決意をし、１つの小さな不誠実な国に平和を守るための意思がなかったとしたら、制裁の強制力は価値のある武器となる。しかしヨーロッパというものは、平和のために少しの犠牲も払う気がない半ダースもの力を持った不名誉国家と、戦争を好む国と、そうでもないかもしれないがより小さな不名誉国家によって成り立っている。そのため制裁による強制力とはむしろ、小さな局地的戦争が世界戦争に発展することをてみじかに決定づける手段となっているように思われるのだ。

先の戦争で考えてみよう。

オーストリア（セルビアへ）：やめろ、さもなくばやるぞ

ロシア（オーストリアへ）：やめろ、さもなくばやるぞ

ドイツ（ロシアへ）：やめろ、さもなくばやるぞ

フランス（ドイツへ）：やめろ、さもなくばやるぞ

ドイツ（フランスへ）：やめろというのをやめろ、さもなくばやるぞ

英国（ドイツへ）：やめろ、さもなくばやるぞ

これではまるで喜歌劇のようだが、これがまさに現実に起きたことなのだ。そしてこれは我々に制裁が機能するための大まかな構想を与えてくれる。制裁とは中国の義和団事変を調停するために軍艦に乗って向かった協同遠征を意味しない。それは（おそらくはそうであろうが）さらに他の一流国家と手を組んでいると思われる一流国家と戦うことを意味するのだ。第一次大戦では、攻撃の利を生かし、ドイツはほとんどヨーロッパを片手で治めるほどの強さを持っていることを証明してみせた。もしヨーロッパがドイツやほかの国々に誓いを守らせるために制裁を用いるならば、ヨーロッパはまず「ひとつになったヨーロッパ」であることを明らかにし、そしてヨーロッパ戦争を宣言しなければならない。

しかしどうやってひとつになったヨーロッパであることを明らかにすればいいのだろうか。制裁を実行に移すうえで、もし国々が誓いを守っていないと証明されたときにのみ制裁が実行されるのであれば、誓いを立てる国々にどのようなメリットがあるのだろうか。どうして他よりもある誓いがより守られそうだといえるのだろうか。

「大変結構」と老政治家がいう。「君が好きなようにやるといい。君は制裁など不可能だというね。そうであろうがなかろうが、その形式と使用の点ではヨーロッパはいかなる同意にも至ってい

ないことを認めなければならない。そして中立の法廷への私の第三の反論は、依然として有効なままなのだ。*敗訴した国家はその判決を平和的に受け入れることはないだろう。*」

その反論は有効でなどない。ただ議論がぐるぐると堂々巡りをしているだけなのだ。

次のように考えてみよう：

E．S．（老政治家） 我々だって可能であるならば平和がいい。しかしどうやってそれがかなうというのかね？

M.（ミルン） いさかいがおきたときに、調停を受け入れることで手に入れることができるのですよ。

E．S． それは結構だが、しかし不都合な判決の受け入れ拒否をさせず、戦争に訴えさせないようにするにはどうするのかね？

M． しかしあなたは平和を望むとおっしゃいましたよね。

E．S． 手に入るならね。

M． ならばいさかいがおきたときに、調停を受け入れることで平和を手に入れることができるのですよ。

E．S． それはそうだが、しかし不都合な判決の受け入れを拒否させず、戦争に訴えさせないようにするには？

M． でもあなたは平和を望むとおっしゃいましたよね。

E．S． 手に入るならね。

M． ならばいさかいがおきたときに……。

そして以下永久に繰り返し。

老政治家の第三の反論に意味を見出すとすれば、せいぜいこのようなものだ：

「調停はうまくいかない。というのも、各国は仲裁によって欲するものが手に入らなかった場合、それを軍事力によって手に入れようとするからだ」

今、仲裁は軍事力の*代用品*として示されている。この章では、我々は仲裁が受け入れ可能な代用品であるかどうかについて検討を行っているところだ。それは国家の尊厳を損なう行為だという反論がある。そして私はその反論に答えようとしてきた。それは不正へとつながるだろうという反論がある。そして私はその反論にも答えてきた。しかしそれを強いることはできないと言うことは、軍事力の代用品としての仲裁を否定することにはならない。

ここで私が言わんとするところを説明するために、教訓話を１つさせてもらいたい。ゴルフで最初にどちらのプレイヤーがドライブショットを打つかは、慣習的にボールトスで決められる。この慣習を一切知らない二人の初心者は、より人間の本質に根差した手段、すなわち殴り合いの喧嘩をして決めようとするかもしれない。しかしこのやり方はあるデメリットがある。というのも、どちらかは勝者となるわけだが、敗者は（確実に）そして両者とも（おそらくは）その一連の行為で生じた負傷によってそれ以上ゴルフをすることができないだろうからだ。何日かの回復のためのインターバルを置いて、彼らはもう一度挑戦するだろうが、またしても彼らは最初のティーさえ打てない。何年かして、ゴルフの最初のティーショットを打ちゴルフを楽しむというこの彼らが直面する困難が、人間の創意工夫をこれほどまでに凌駕しているはずはないという考えに彼らは至るだろう。そして彼らは友人に相談し、その友人は彼らに偉大なるボールトスの教義を伝授するのだ。

くだんの２人のゴルフ初心者は、このアドバイスを感心しながら聞き、ああだこうだと心の中で試行錯誤してみる。そして心からこういうのだ。

「ボールトスはうまくいかないね。というのも、ボールトスに敗れたプレイヤーが平和的にその逆境を受け入れるとは限らないからだ。」

この意見に対してありえる返事はひとつだ。

「それならば、どっちがいい？殴り合うか、ゴルフをするか」

そして老政治家に対してありえる返事はひとつだ。ヨーロッパはどちらを求めるだろう。戦争か、平和か。

もしヨーロッパが平和を求めるのであれば、仲裁を受け入れることで手に入れることができる。

もしヨーロッパが戦争を求めるのであれば、仲裁を受け入れないことで手に入れることができる。

仲裁とは戦争の代わりになるものなのだ。勝利の代わりになるものではない。

政治家が求めるのはどちらだろう。戦争か、戦争の代用品か。現状では彼らは、いかに合意によって事態が収まることを願っているかを説明すること、そして軍事力による事態の解決を放棄していないことについて彼らがいかに腹を決めているかを明らかにすることの間で時間を割いているようだ。彼らが論じる唯一の武力放棄とは、相手国が彼らに対してしっかりと行っているその武装の放棄だけなのだ。彼らが議論する仲裁とは、戦争の制裁によってあらかじめ保護されている仲裁のことだけなのだ。

5

ジュネーブの国際連盟本部の新しい建物の庭では、大きな通りがある（に違いない）。その脇には街路樹ではなく、歴代の偉大なる名将の像が立ち並んでいる。その列の最後には、「安全保障」の巨大なシンボル像が剣を抜いた状態で立っていることだろう。そして反対側には、半分さやから剣が抜かれた状態の、同様に巨大だがわずかにあいまいな像が、「制裁」と刻印されている。それぞれの像の間を行ったり来たりしながら、フロックコートを着た小さな男たちが、様々な言語で語り合いながらぶらぶら歩いている。通りの最後にたどりつくたびに、そしてこれらの像を見上げるたびに、彼らは当惑して瞬きをするのだ。そして目をこすり、言うのだ。「そうだな。もちろん、私たちは間違えた道を進んでいるところだ」そしてぶらぶらと引き換えしてゆく。

彼らはこの行為を「*平和探しのための通りの探索*」と呼ぶのだ。

15章　平和会議のための覚書（Notes for a Peace Conference）

1

私は空想する。ラムジー・マクドナルドと、ドゥメルグとムッソリーニとヒトラーが私とともにディナーを囲んでいるというものだ。幸運なことに、彼らは全員英語を話すことができる。その空想の中では、彼らを実際の重要性とは切り離して、まったく普通の人々として捉えている。ここでいう普通の人々というのはつまり、通常の言葉で話をして、それが通じる相手という意味だ。それはスミスでもブラウンでもジョーンズでもロビンソンでもいい。つまり、通常の言葉を当たり前に使って対等に話ができる友人として、彼らと同席しているのだ。私が少しばかりいい塩梅になり、他の出席者も満腹となったディナーの後に、彼らは平和会議を始める。私は非公式の座長としてそこに同席することが許されているのだ。そして私ははじめのあいさつを行うことも許されている。

これは（私は語り始める）平和会議です。そしてしばらくの間、皆さんはともに平和への新たな道を探すことになっています。その探検を始める前に、みなさんに思い出していただきたいことがあります。

ヨーロッパの平和はみなさんの手の中にゆだねられています。私がいいたいのはただそれだけです。つまりそれは英国、フランス、ドイツ、イタリアの手の中にゆだねられているわけではないのです。平和か戦争をもたらすのは、ここにいるあなたがた4人の力にかかっているのです。まぎれもなくその話題になるでしょうが、みなさんが「フランスの窮状」について言及されるとき、そこで語られるのはドゥメルグ氏の窮状なのであります。そして「ドイツの脅威」はほかならぬ、ヒトラー氏の脅威なのです。もし「不実な英国」を信用できないのであれば、それはラムジー・マクドナルド氏が誓いを破るのを恐れていることを意味するのです。そして「イタリアの拡大への欲

求」が脅威であるのならば、それはただ単にムッソリーニ氏の欲求が脅威なのです。すなわち、みなさんは軍事力を介して互いに対峙する必要はなく、ただみなさん同士で対峙すればよいのです。

あなた方がこの事実を心にしっかりと刻み込むまでは、あなた方が今から探そうとしている道はいずれも行き止まりなのです。というのも、すべての道の端っこには、みなさんが作り出した怪物がその道を閉鎖するように立っているのですから。

ヒトラー氏以外にドイツの亡霊はいません。ムッソリーニ氏以外に盲目的好戦的愛国主義者のイタリア人はいません。ドゥメルグ氏以外に手におえないフランス人はいません。マクドナルド氏以外に不実な英国人はいません。あなた方は、緊急の防衛手段を一時しのぎにあしらえる必要を要するような、抵抗しようのない自然の力に翻弄されているわけではありません。あなた方はせいぜい、ほかならぬあなた方ご自身の身近にあるものほども脅威ではないものに直面しているだけなのです。（こういうと不自然に聞こえるかもしれませんが）あなた方は時としてあなた方ご自身の重要性というものに無自覚なのです。世界の幸福も不幸も、あなた方の言葉一つにかかっているのですから。

ほかならぬあなた方４人なのです。ご自身があれやこれやといった「国の雰囲気の波」によって動かされているようなふりをされても無駄です。そのような波は、あなた方の空想か、ご自身によって作り出されたものなのですから。通常の人間の欲するものは、平和なのです。自分自身の人生を生き、自分自身の仕事をすることなのです。目覚めてすぐに「なんということだ、領土を拡大しなければ」などというイタリア人はいません。そんなイタリア人はムッソリーニ氏だけです。目覚めてすぐに「なんということだ、我々は汎ドイツ主義でなければならない」などというドイツ人もいません。そんなドイツ人は、ヒトラー氏と彼に命じられた者たちだけです。もしムッソリーニ氏が平和を望み、平和への道がトリポリをトルコに返還することだと考えたならば、何の困難もなく、彼は国民に（その国民というのはトリポリがどこにあって、現在はイタリアに属することを知っている国民に限られますが）その意思表示を行うとき、彼らの国の偉大さを知らしめることができたことでしょう。あなた方４人は、人間というもののもつ本質や情熱、熱狂に支配されているのではありません。ほかならぬ、あなた方自身のそれに支配されているのです。あなた方は威張り散らしたり魅了したり演説したりすることで、ご自身の選択によってその国民を幸福にも不幸にも導くことができるのです。

今ここで、あなた方は平和を望むかどうかという問いとともに、この会議を始めるよう提案いたします。その点はみなさんがまだ議論していない点だと思います。英国は名誉と平和については議論しています。フランスは安全保障と平和について議論しています。イタリアは平和と好戦心について議論しています。そしてドイツは平等と改正と少しの復讐心と平和について議論しています。このようにあなた方の注意を妨げるものが多すぎて、控えめな平和の姿はほとんど誰にも認識されていないのです。

ご自身が平和を求めるかを考えるとき、必然的にみなさんはその代わりとなるものについて考えることでしょう。すなわち、戦争のことです。しかし抽象的な戦争についていくら考えても無駄なことです。あなた方が実際にかかわることになる特定の戦争について具体的に想像する必要があります。つまり、次の戦争のことです。

皆さんは先の戦争のことをよく覚えていらっしゃることでしょう。その戦争の間、ヨーロッパがいかに生き、いかに死んだかご存知でしょう。あなた方はヨーロッパがそれ以来生き残りをかけていかに奮闘してきたかを見てきたことでしょう。先の戦争のように、次の戦争でもヨーロッパは生き残るとお思いですか？もう１度ヨーロッパで行われる戦争が人類の文明を破滅させるということは、*絶対*にありえないことなのでしょうか。

さあ、いかがでしょう。

あなたは、ヨーロッパはもう一度戦争があっても大丈夫だという結論に至るかもしれません。そのような結論に至るのならば、みなさんは世界に対して、戦争が終わるときにみなさんの国がどのようになるのか、安心感を与えてくれるような大雑把な見取り図を示す必要があると思います。たとえばマクドナルド氏は国民に所得税に関することについて述べるかもしれません。つまり人の関心を集めるようなことです。実際に先の戦争の結果、所得税は１シリング２ペンスから６シリングに上がりました。今は４シリングです。おそらく次の戦争の後では、８シリング10ペンスになることでしょう。マクドナルド氏はそのことについて、我々がなぜ気をもまなくてよいのか、事前に国民に説明することができるでしょう。しかし私は、慎重に議論を重ねる際に、みなさんが以下の書面にサインをするだろうと期待しています。

「*抽象的な戦争への我々の偏った考えを交えることなく、我々が現在もなお争っている事態の解決に対し偏った考えを交えることなく、我々は以下をここに記録する。非常に繊細に組織された世界では、現在存在する経済的な状況下では、現在使用可能な破壊兵器によって、もう１つヨーロッパ戦争が起きれば、文明の終わりを意味する。それゆえ祖国だけでなく人類への我々の責任を認識し、最初の義務として、ここに完全なる戦争の放棄を宣言する。*」

戦争の放棄とは、あなた方の*最初の*義務であることを絶えず念頭に置いておかなければなりません。戦争が廃止されうるのかどうか、そしてその方法があるのかを考える前に、まずこの点に同意しなければなりません。「実現可能な武装解除計画案を持ってきた国があったらすぐに、我々も戦争の放棄に同意しよう」などと考えるのは無駄なことです。戦争の放棄が最初になければなりません。そしてそれを行動に移す方策についてはそれから議論されなければなりません。これはなにも、あなた方にとって非合理的な提案ではありません。もしわずかな収入しかない人が、彼の愛する息子が高額な手術によってのみ救えると言われたならば（そしてそれを信じたとして）、彼は最初にその手術に対して支払う財政状況について考えるようなことはしないでしょう。彼は金を工面しなければならないことや、その準備金の負担が彼に強いられることをいくらか考えながらも、第一に手術を行うことを決意するでしょう。そのため、人類全体の生命が危機にさらされているとき、まずその命の救済を第一に考え、それからあなた方の野心と愛国心を守ることを考えるのは非合理的ではないのです。

そのため、私はみなさんに、「普遍的平和」の*可能性*ではなく、その*必要性*を最初に話し合ってほしいのです。その必要性とは、現在の状況と過去の経験と、そして悲惨で凶暴な未来を考慮して生じるものなのです。これまでの平和会議で語られてきたすべてのこと、名誉と安全保障について書かれてきたすべてのこと、ここ数年の間戦争と平和について議論されてきたすべてのことの中で90パーセントは、30年前のハーグ万国平和会議であれば、平和主義者と軍国主義者の議論を満足させる内容だったかもしれません。みなさんが今廃止を検討している戦争とは、1905年の戦争[6]とは違います。当時の戦争とはせいぜい、ちょっとばかりの兵士の犠牲と、市民が味わうスリルと、政治家と将軍が得る多少の名誉を意味する程度のものだったのです。皆さんが検討されておられる戦争とは、何世紀もかけて作られてきた人間的な、文明的な、文化的なものすべての死です。人類の自由と尊厳の死、普通の人々が抱くあらゆるささやかな幸福の死なのです。人間がいつくしんできた知識と美の中に作り上げられた世界の偉大なる希望の死なのです…そして皆さんはいまここにいらっしゃいます。その死からの解放はみなさんの手中にゆだねられているのです。そしてみなさんが同意するよう求められているのは、私たちをその死から解放するという意思なのです…。

このようにして平和会議は幕を開け、弓と矢についての議論が始まるのだ。

2

E．S．　「弓と矢」という言葉で君は何を言わんとしているのかね？

M.　説明しましょう。

そして私がそれをどう説明しようか思案しているとき、ロザミア卿が私に救いの船をだしてくれた。「オブザーバー」紙の「今週のことば」に、彼はこのようなことを書いているのだ。

「今日の状況から鑑みるに、現在がもう１つのアルマゲドン[7]の開戦前夜であることは間違いないであろう。しかし我々はまだそれを戦う準備が整っていない――ロザミア子爵」

ここに、書かれた２つのことについて、しばらくの間真実として受け入れることにしよう。

1．現在は、もう１つのアルマゲドンの開戦前夜であることは間違いない。

2．我々はまだそれを戦う準備が整っていない。

それら２つの事実のうち、どちらが我々の文明にとって重要だろうか。

文明、キリスト教、そして全人類にとって圧倒的な恐怖の対象となるのは、もう１つアルマゲドンが存在するということだ。平和会議に出席している政治家たちの圧倒的な関心ごとの対象となるのは、彼らの特定の国家が次のアルマゲドンの準備ができているかどうかということだ。彼らはまだトーガ[8]を身にまとい、うやうやしく言うのかもしれない。「今日の状況から鑑みるに、現在がもう１つのカルタゴによる侵略前夜であることは間違いない。しかし我々は重装歩兵が不足している。」

もし今がもう１つのアルマゲドンの前夜であるのなら、我々はつまり世界の終わりの前夜にいることになる。それはまったく確かなことだ。そして世界の終わりの前夜には、世界でもっとも偉大なる政治家たちが（神よ世界を救いたまえ）、いまだに尊厳や名誉や威信といった感傷的な、子どもじみたくだらないことをぶつくさと言っているのだ。そしてその中でも最も偉大なる政治家が、「ボーイズ・オウン・ペーパー」[9]を編集する代わりに、「イタリアの人々の偉大さ」を「機関銃の歌」とともに守るよう提案をしているのだ。彼らの上には、巨大な崩壊しかけの断崖絶壁がそびえたっている。そしてその影の中で、彼らは自分たちのちっぽけなレスリングの試合について議論するか、どちらが先に服の留め具を外すのかを議論している。彼らの頭の中には、それぞれにたった１つの確固たる考えしか浮かんでいない。その考えとは、彼らの頭上の絶壁が崩れ、1,000トンの岩が崩れ落ちてきたときに、自分は負けるほうにはなりはしないという考えなのだ。[10]

つまり私が「弓と矢」という表現で言いたいことはこういうことだ。2,000年前にそうであったのと同様の世界。収穫が終わるまで戦争行為を延期できないかを話し合いで決める半ダースほどの部族たち。1934年に平和について議論するということは、それと同じ精神の中で行われなければならないのだ。

3

共感的読者：　理論の上では、あなたは完全に正しいように思います。しかし現実世界ではどうでしょう…もう少し現実的になれないですかね？今は1934年だ。そしてここには４人の偉大なる人物たちがいます。そして望むなら、その他すべての国家の代表者を集めることだってできるのです。誰が最初に何をしたらいいんでしょうか？現実的な平和会議への覚書を示してはもらえないでしょうか。

1934年の平和会議への覚書

１．会議はまず「もう１つのアルマゲドン」がたどることになるであろう道筋とその結果について深く考えるべきである。その目的のためには、最高峰の軍事的、経済的権威の使用が許されている。フォッシュ元帥[11]はこのように語る。「次の戦争は世界大戦となるだろう。ほとんどすべての国がそれに参加することになる。そして戦闘は男だけでなく、女性や子どもをも巻き込むことになるだろう。」ボールドウィン氏は、文明はそのような戦争を生き抜くことはできないといった多くの人の１人だ。平和会議は、それらの見解や、そ

のほかの権威ある意見を十分に考慮し、そしてその結果を声明として発行すべきだ。そしてその結論が満場一致でないならば、各国の信条は分けて記録されるべきだ。ヨーロッパ全体への戦争の影響が深く考慮されることになるのは理解されうるが、「勝ち」「負け」といった特定の国の特定の状況は考慮されるべきではない。

2．もし平和会議が次の戦争はヨーロッパと世界にとって致命的なものになると結論づけるのならば、おそらく次の戦争はあってはならないという結論にも至ることだろう。

3．各国はしかるべくして以下の問いに答えるべきである。「もし仮に他のヨーロッパ諸国が貴国と同等に良心的信念を持って戦争を放棄するというのであれば、貴国は戦争を完全に放棄する準備があるか（例えば､攻撃と防衛両方の戦争を）。」

4．理論上その誓約を積極的に受け入れようとする国もあれば、受け入れようとしない国もあるだろう。つまり、現状に*満足*し、ただ平和になることを望む国もあれば、現状に*不服*で、彼らが知っている一つの方法でそれを改善しようとする考えを捨てられない国もあるだろう。つまり、戦争という伝統的な方法のことである。そのため現状に不満を抱く国家は、いかなる条件であればその誓いを受け入れることができるのかを示さなければならない。

［例えば、ドイツの条件は植民地の回復かもしれない。］

5．現状に満足している関係諸国は、どの程度で不服を抱く国家を満足させられるかを深く検討しなければならない。彼らは、彼らが下した「次の戦争」はないという決意の光の中で、そして彼らの譲歩が完全なる平和への保証なのだという仮定にのっとり、このことについて深く考えなければならない。

［「譲歩」の例として、そしてそれを検討するための方法として、スペインのジブラルタルへのありそうもない主張を例にとろう。通常、英国の愛国主義者はジブラルタルの譲歩という考えに対して恐怖を抱いているものだが、しかし今は通常の状況ではないのだ。(a)ジブラルタルの価値が軍事上のものだけであるならば、平和が確証される限りそこを譲歩しても何も譲歩したことにならない、(b)ジブラルタルにそれ以上の価値があるのならば、先の戦争で英国が支払った70億ポンドと10万人の犠牲とを合わせて秤にかける必要がある、ということを念頭においておかなければならない。もし最後の手段で、英国が普遍的平和とジブラルタルのどちらかを選ばねばならず、そしてジブラルタルを選んでいたとしたら、少なくとも英国がどの程度平和を真剣に求めているのかを知ることができるはずだ。］

6．もし膠着状態に陥ったら、その正確な状況が世界に公開されるべきだ。例えば、どの国が「不服」で、彼らが何を譲歩していて、どの程度の譲歩が国々によって満たされ、何が拒否されているのかについてである。

7．平和会議での交渉が未解決に終わったときには、各国の責任ある代表者が国家の代表としてではなく、世界の未来がその政策ひとつにかかっている人物の１人として、世界に対して声明を発表しなければならない。

［例えば、ムッソリーニがイタリアさえ無事であるならそのほかの世界がどうなろうがしたことではないと心から感じたのであれば、彼はそう言うべきである。そして彼は、世界が破滅するのにどうしてイタリアが無事でいられるのかを説明しなければならない。または代わりに、なぜイタリアが他のヨーロッパ諸国を巻き込むことなしにヨーロッパ戦争に専念できると考えるのかを説明しなければならない。また、もし可能性として、ムッソリーニが、平和とヨーロッパの幸福をもたらすイタリアによる譲歩が、奇妙な理屈で、自国の名誉を損ねるものであると考えるのならば、それが自国に対して強要されるべきだと意図している個人的な概念としてのものなのか、それとも自国民のほとんどが同じ考えを持っているのかについて説明しなければならない。］

8．平和会議を通して、以下の事項が常に念頭に置かれなければならない。

(a) 歴史上、ヨーロッパは今ほど戦争による混乱、あるいは戦後の影響を耐えるのに適さない状況だったことはない。

(b) これ以降、1914年以降は特に、ヨーロッパにある２国間で争われるいかなる戦争も、ただちに他国を巻き込み、そしてその戦後の影響の中で、おそらく破滅の域まで文明世界を崩壊させることになるであろう。

(c) *すべての代理人はそれゆえ、彼の国だけでなく、文明全体に責任があるのだ。*

E．S．（老政治家） 大変興味深い。君はこれまでの平和会議が直面してきた１つの避けがたい困難に関する意見が欠けているようだ。

M． 加盟国による誓いへの「忠誠」[12]のことでしょう。

E．S． その通りだ。もう一度尋ねよう。そのような忠誠がどうして存在しうると考えるのかね。そして（同様に重要なことだが）それが存在するとして、どうしたらその中に信念を見出すことができるのかね。

M． 私の主張はこうです。あなたが（これまでの会議がそうであったように）各国の*背信行為*を想定する限り、あなたはどこにもたどり着けはしない。それゆえ、この会議は各国の*忠誠心*を前提に始める必要があるのです。この仮説のもと、どのようにしたら普遍的平和をなしとげられるのかを見つけるために。

E．S． 結構。普遍的な忠誠というものが存在し、そして互いの忠誠心を信じあうことができれば、普遍的平和は実現可能だろう。そして次はどうする？

M． では、次章では愛国主義について話をしましょう。

E．S． それがこの話に何の関係があるというのかね。

M． では見てみましょう。

16 章 愛国主義と誓約（Patriotism and Pledges）

1

愛国主義者たちが自分たち自身のためには声高に主張し、他者に対しては否定する愛国主義は、国への誇りの意味での愛国主義とは分けて考えられなければならない。英国の愛国主義者が自国を誇りに思うとき、それは実際の英国という国に対してではなく、彼らがそうであると願っている英国を誇りに思っているのだ。英国は世界に議会政治を与えたが、愛国主義者は議会政治を誇りには思っていない。むしろ彼らはもっぱらイタリアの政府のあり方を好む傾向にあるのだ。英国は道徳心を用い英国特有の歩み寄りを行う国であるが、愛国主義者はこの手のことであれば、フランスのほうがうまくやると考えている。英国は競技というものに気取らない愛情を持った国であるが、愛国主義者はその愛情よりも、アメリカの競技における集中力のほうがより優れたものだと考えている。英国独自のビジネスの手法は、ドイツのそれよりもはるかに劣ると考えられているのだ。実際のところ、我々が英国をそのままの姿で考えようとするとき、愛国主義者が誇りをもって愛することができる唯一のものは、次のような考えだけなのだ。もし英国が徴兵制を適用したら、もし現在教育に費やされている費用を海軍や空軍の増備に用いたら、少なくとも英国は愛国主義者が望む姿になるだろう。

すなわち、愛国主義とは、その人物の国の軍事力に対して抱かれる熱烈な関心を意味すると定義できるかもしれない。太平洋の小さな島に築かれたコミュニティに、その島を愛する者が暮らしているとしよう。彼らは自分たちで築いた法と、彼らが実現した自由で幸せな生活を誇りに思ってきた。しかし、自分たちを守るためには戦闘用カヌーを作るべきだと誰かが吹き込むまで、彼らは愛国主義というものを知らないのだ。それから愛国主義者は自らが愛国主義者であることを表明し、島で幸せに暮らしていた人々のことを、遺憾にも非愛国主義的なものたちとしてさらし者にす

るのだ。

この類の愛国主義は、伝統ある信仰特有の執拗さでヨーロッパに強要されてきた。オックスフォード・ユニオンが「いかなる状況下でも王と国家のために戦うことを拒否する」と宣言するとき[13]、それはいかなる状況下でも教会へ行くことを拒むといった動きに対する教会の人間が抱く感情よりも、愛国主義者の間にはるかに多くの恐怖と怒りを生み出した。実際、いかなる状況でも英国のためには仕事をしない、英国では暮らさない、英国を愛さない、誇りに思わないという決意を抱くことよりも、英国のために戦うことを拒否することのほうが、愛国主義者にとってはよりおぞましいことなのだ。というのも、愛国主義者が自らの信仰への献身を評価できるのは、唯一戦いに関する（それも望むらくは他者の戦いに関する）ものだからだ。

これが世界に感銘を与えた信仰なのだ。この信仰がいまやキリスト教よりも優先される信仰なのだ。ジョンソン博士[14]が（ホレイショー・ボトムリー[15]が生まれるいくらか前のことだったが）「愛国主義とは悪党の最後の逃げ場所」だといったとき、彼のこの定義は次の真実を内包していた。つまり、愛国主義は、悪党が自分自身に与えられて当たり前と思っている、教会的特権と同様の権利をその信者に授けるのだ。「我が祖国のため、それが正しかろうとも間違っていようとも」と愛国主義者は言う。そしてそう言いながら、彼は愛国主義の名のもとに、自身が犯してきた悪事へ赦しを与えているのだ。

そうであるならば、悪党の間でそれが成立しないのと同様に、さまざまな国の愛国主義者たちの間でも、忠誠などというものは成立不可能なのだ。しかし、普遍的平和が可能になるという考えは、普遍的な忠誠がありえるという仮説の上でのみ成り立っている。さらに、愛国主義が花開くのは、戦争が起こるかもしれないという仮説の上でのみなのだ。それゆえ、我々の問題は次のようにまとめることができる。

戦争は愛国主義を意味する
愛国主義は背信を意味する
背信は戦争を意味する

あるいは、

平和は愛国主義の消失を意味する
愛国主義の消失は忠誠を意味する
忠誠は平和を意味する

平和主義者の抱える問題とは、この戦争―愛国主義―背信―戦争という忌まわしき円環をどこで、いかにして断ち切るかということだ。まずどこから攻撃を始めるべきだろうか。

前章で、我々はその円環に立ち入って、忠誠を打ち立てたと仮定した。そして平和会議のメンバーも同じ仮説を打ち立て、彼らがどこにたどり着くのかを見るべきだと提案した。彼らはおそらく平和に行き着くことだろう。というのも、忠誠が存在しうるという仮説のもとでは、安全保障と制裁といった２つの障害は消滅するからだ。もしある国家がこれ以上他国と戦わないと誓いをたて、*そしてその言葉が信頼できるのならば*、ほかの国はより大きな安全保障を手に入れることができる。そして制裁とは背信行為に対する防御用の対策でしかないので、これ以上の制裁はもはや必要とされていない。忠誠さえ与えられれば、平和への道のりはそう険しくはないのだ。

しかしいかにしてその忠誠は成し遂げられうるのだろうか。愛国主義はどうやって消し去ることができるのだろうか。あるいはどうしたら愛国主義者たちを、互いに信頼しあうよう説得することができるのだろうか。

2

その答えは愛国主義が正統な宗教であり、あらゆる正統な宗教には往々にして不安を抱く信者が必ずいるという事実にある。愛国主義はほとんどすべての人々に道徳の強要を行う。それは中産階級に世間体が強いられ、おしゃれ好きな人々にファッションが強いられるのと同じだ。自分自身のためだけにレースのカーテンを愛する女性はいなかいはずだ。自身の体を18インチのコルセットに収めたがる女性もいなかいはずだし、帽子を片目にかかるようにかぶりたがる女性もいなけれ

ば、タイトスカートをはいて両足を縛りたいと考えている女性もいない。しかし「すべきこと」はいとも簡単になされて当たり前のことに変わる。一般的な女性たちがファッションに疎いと思われることに対して過敏に反応するのと同じくらい、一般的な男性たちは、非愛国主義的であることの責めに対して神経過敏なのだ。そして彼の愛国主義は、新しい流行が女性に強いられるのと同じように、男性にしっかりと強いられるのだ。自由の身であるならば、彼は個人的な希望や恐怖や愛や憎しみに対して幸せでいられるだろう。そして心の中に抱いている国への誇りがなんであれ、公に表明する必要はないし、あるいは表明することになっても、それはわざわざ航空機の中で表明するようなものではないのだ。

しかし彼は自由の身ではない。彼は愛国主義者であり、彼のその信仰は、彼に宗教的権威への服従を要求するのだ。彼が抽象的な意味での戦争を承認していようが非難していようが、あるいは彼がある具体的な戦争を正義と思っていようが悪と思っていようが、戦争が始まるとすぐに、彼は自由の身ではなくなるのだ。キリスト教の支持者でさえ、口惜し気に彼の信仰を愛国主義へと受け渡さなければならないのだ。

口惜し気に…不安を抱く…。これらの言葉は、忠誠を可能にするものだ。というのも、背信とは愛国主義の*抑えがたい欲望*の下でのみ脅威となるものだからだ。

もしわれわれの指導者が戦争を放棄すれば、それによって、彼らは愛国主義を解体するだろう。私は愛国主義を「その人物の国の軍事力に対して抱かれる熱烈な関心」と定義したが、人は存在しないものに対して熱烈な関心を抱くことはできないのだ。つまり、愛国主義の抑えがたい欲望は、もはや通常の人々を動かすことはできないのだ。彼は自身の愛国心や国への誇りを表明するためのはけ口を新たに探す自由がある。どんなはけ口が見つかるだろうか。彼が自国の*名誉*に熱烈な関心を抱くようなことはありえないだろうか。彼の国が決意をもって、今後は忠誠を貫くと表明することへの関心などありえないだろうか。

平和主義者でも公然とした愛国主義者でもない、一般の人の場合について考えてみよう。平和を願っていて、しかし非愛国主義的ととられないよう平和のために行動を起こすことを恐れているような人のことだ。彼は全身全霊をかけて、攻撃のための戦争は悪いことだと信じている。しかしもし攻撃を受けたら、自分自身を守らなければならないことは明らかだ（と彼はいう）。彼は他国を攻めるために祖国に力を貸すことはないと誓うだろう。しかし、戦争が起きた時には、彼はその戦争が攻撃目的の戦争ではないという確信を受け入れるか、（もしそれが不可能だと気付いたならば）愛国的に、彼の祖国の要求は、彼の誓いを破る罪を許すものだということを受け入れることになるのだ。彼は不安な意識を抱えながらも、結局戦争を戦うことになるだろう。

しかし、今、彼の指導者である愛国主義者の高僧たちに、彼が二度といかなる状況下でも戦わないという誓いを守るように言わせてみよう。彼が可能な限りしっかりとその誓いを立てるよう、高僧たちに懇願させてみよう。祖国の名誉は、彼がたてた誓いに対して真摯であることを求めていると説得させよう。彼の信仰が求める国への誇りとは、祖国の忠誠への誇りだといわせてみよう。そのとき何が起きるだろう。喜んで彼は誓いを立て、信心深くそれを守ることだろう。というのも、彼は再び自由な身となったのだから。

3

くだんの想像上の平和会議をもう一度始めよう。

代表者たちは、普遍的平和が必要であると同意している。彼らはそれぞれの国が平和に対して誓いをたてる条件について同意している。彼らは互いの条件を受け入れている。では彼らはいかにして互いの忠誠心を確かめるのだろうか。

改良点についてはあとの節で論じるとして、私はまず次のようにありのままの提案をする。

１．採択されることになる誓約は、攻撃と*防御*両方の戦争の放棄となるだろう。そしてすべての

争いは仲裁にかけられることになる。

2．その誓約は最初の段階では、各国の指導者によって採択されることになる。

3．その誓約は考えられる中で最も厳粛な誓約であり、そして可能な限り明確に公表されなければならない。

4．自分たち自身が誓約を守るために、指導者たちはそれぞれに自国民たちにもそれと似た誓約を指導しなければならない。それのために特別な日が設けられることになるだろう。例えばそれは終戦記念日かもしれない。宗教を公言する人にとって、その誓約とは宗教的な誓いとなるだろう。

5．関係国の中に信者がいる宗教上の主たる人物は、その誓いを破った人物が、いかなる状況下であっても、またいかなる愛国主義の抑えがたい欲望のもとであっても、まさにその事実によって破門されると宣言することになるだろう。

6．宗教上の主たる人物と国家の指導者の両方によって、関係するすべての人々に次のことが明らかにされるだろう。すなわち、他者が怠ったからという理由で、その誓いから解放される人は一人もいないということだ。

4

愛国主義者は腹を立て、これを子どもじみた不合理なものとして簡単に片づけるだろう。もし彼が本書の第1章を読み直せば、戦争がいかに究極に子どもじみたものであるかを思い出すだろう。また彼は、自分自身が子どもだったころ、子どもじみたふるまいが「廊下に立たされる」という子どもじみた改善策で正されたことを思い出すかもしれない。何年もの間、日光節約時間（サマータイム）は子どもじみた不合理なものとして非難されてきた。そして事実そうなのだ。というのも、それはせいぜい公認の子どもじみたごっこ遊びに過ぎないからだ。しかし日光節約時間を作ったのは、戦争という子どもじみたごっこ遊びからなのだ。

この戦争放棄への崇高なる誓いは、もし平和への熱烈な願いがなければ、子どもじみてばかげているばかりか、考慮する価値もないものであることを認めなければならない。平和主義者たちは何度もこの困難に立ち向かってきたのだ。すなわち、誰を説得しようとすればよいのかも、そしてその人物に対し何を説得しようとすればよいのかもわからないということだ。あるとき軍国主義者は、もちろん自分も平和主義者と同じくらい平和を願っているといった。しかし、彼はまた「人間の本質とはそのようなものである」[16]と主張し…そして次に、人間の本質を扱う提案が出されたとき、こう加える。もちろん、「人間の最も偉大な本質は軍事的衝突から現れるものだ」ということを忘れてはならない、と。我々にできるのは、それぞれの議論をひとつずつ順番に扱うことである。しかしそれぞれの新たな議論は、先の仮設の結論とならなければならない。私はヨーロッパが望みさえすれば平和を実現することができるやり方を提案するが、それは不可避的に、ヨーロッパの平和への願いが私と同じくらい切実であることを前提としているのだ。

1．その誓いとは、攻撃と防衛の両方の軍備を放棄するというものである。[18]防衛のための軍備が放棄されなければ、この誓いは価値がないものとなる。もし人がすべてのものからの完全なる自制を誓うのであれば、彼は自身が誓いをいつ破るのかを分かるだろう。しかしもし人が条件つきの自制を誓うのであれば、その人は自身にその状況についての解釈の自由を残すことになる。そして彼の誓いというものは完全なる価値を持ちえないものになるのだ。侵略戦争と防衛戦争の両方の放棄を誓うことで、その誓いを破る機会は与えられても、それをうまくはぐらかすための希望は残されないのだ。

2．英国の場合、国王が自ら誓いを立てれば十分であるように思える。というのも、いかなる民意の指導者も、あえて王が偽りの誓いを立てたなどと指摘することはないように思われるためだ。独裁制下の国であれば、独裁者と肩書上の主たる人物（もしいれば）が誓いを立てればよいだろう。そして民主主義国家であれば、各党の党首が

それぞれに誓いを立てればいいだろう。

3．誓いの性質というものは、その誓いを守ることになるものたちの性質に合ったものでばければならない。あるものにとっては、聖書に誓われたことは犯されざる神聖なものだ。またあるものにとっては、名もなき戦士の墓に刻まれた誓いや、旗の下に示された誓いが神聖なものなのだ。他者から絶え間なく、恐れずに犠牲を求められることを恐れないものたちは、自分たちの誓いがけがされるような出来事にあっては自らが死すことを誓うことだろう。もしヒトラーが戦争放棄の誓いを破ることができるならば、同様に、その誓いを破ったら自殺しなければならないという誓いも破ることができると考えられるかもしれない。しかしあの誉れ高きヒンデンブルグ[17]が今ごろ自殺を強いられていると知ることは、それに何らかの効果を与えるかもしれない。[英国の愛国主義者は、英国王によるそのような誓いが彼の国の軍隊の精神にどのような効果をもたらすのかを考えるのに2分間ほど費やすだろう。]

4－5．持続的な平和への希望を与えてくれるのは、これらの条項である。これさえ叶えば、人類史上初めて、人は名誉と愛国主義の間、国と神の間で忠誠心を分ける必要がなくなるだろう。前のほうの章で私は、国家に仕える伝統的な手段として、教会は国家によって行われる殺人を承認していると述べた。そして架空の聖職者との会話の中で、私は彼に憤りながら、教会は国家の堕落と信仰の放棄を是認しているという見解を示した。そして今や、その伝統的な愛国主義の形が放棄されたのだ。もしキリスト教徒たちが依然として愛国主義者であろうというのであれば、彼らはまず新たな形でキリストを否定しなければならない。彼らはまず、神の名でなされた厳粛なる誓いを新たな形で打ち壊さなければならない。教会は彼らのその行為を赦すだろうか。どうしたら彼らにそんなことができるのか、私にはわからない。あるいは誉れ高いものがどうやって自身の善意によって赦されることになるのだろうか。私にはわからない。

6．この条項はもちろん不可欠である。もし「あっちが先に始めたから」と主張することによって背信行為がいったん許されてしまったら、我々は裏切りと恐怖と偽りの告発の沼地に戻ることになってしまう。我々はそれぞれが個々に責任を持つ、状況に左右されない誓いの上にしっかりと立っていなければならないのだ。

5

老政治家はこの平和計画を「常識に反した」ものとして一蹴する前に、どこからその不合理性が始まっているのかを明確にしなければならない。例えば：

(i) もしヨーロッパの重要人物たちが依然として戦争や戦争が始まる危機の中に、自分たち自身や彼らの国にとってのメリットを見出しているというのに、彼らが戦争を放棄しようと真剣に試みるなどと考えているのは不合理だ。

(ii) 彼らが互いに有利になるために戦争を放棄するふりをしているにも関わらず、彼らの誓いに意味があると考えるのは不合理だ。

反対に：

(i) もしヨーロッパの重要人物が、これから起きるであろうもう1つの戦争がヨーロッパと彼自身に破滅をもたらすと確信するのならば、彼らがそれを回避するよう決意すると考えるのは不合理ではない。

(ii) もし彼らがそのもう1つの戦争を回避するために戦争を放棄するのであれば、彼らの誓いは確かな第一歩としての価値を持つことになる。

私の平和計画においては、ヨーロッパの重要人物たちに、*最低限の*知能と*最低限の*人間性と*最低限の*名誉があるものとしている。私は彼らが、次のヨーロッパ戦争が起きれば、それが世界にとっての完全なる大災害となることが理解できる程度には知性があると仮定している。その戦争の言葉にできないほどの恐怖からヨーロッパを守りたいと思う程度には、十分な人間性があると仮定している。そしてヨーロッパを救うために誓いをたてるとき、自身の言葉を守るのに十分な名誉を持っ

ているだろうと仮定しているのだ。

老政治家は、重要人物と老政治家たちにわずかでも知性と人間性と名誉があるなどと信用するのは不合理だというかもしれない。おそらくそうだろう。いかなる場合でも、愛国主義的な政治家の人間性と名誉を高く見積もってはいけないという点で、私は彼に同意せざるをえない。その理由で、私は彼らの人間性と名誉を、私が信ずるところの一般的な人々の人間性と名誉で補うのだ。おそらく私が不合理なのは、人間の大半が誉れ高く、優しいと信じている点なのだ。そのことは老政治家が私に教えてくれるに違いない。

しかし平和会議が平和を確かなものにしようと試みるものであるという仮定では（それがおそらく不合理なのだが）私の提案は（あるいはその問題に対する全員の提案は）熟慮する価値がある。この15年間、平和会議は使い古された階段を行き止まりに向かって登ったり下りたりし続けてきた。彼らの到達点はこのようなものだ。

1．戦争は軍備に依存している。
2．それゆえ、平和への道には軍事力の放棄が必要だ。
3．しかし国家は完全なる安全保障がない限り軍事力を放棄することはない。
4．それゆえ彼らには安全の保障が必要だ。
5．安全保障とは制裁によってのみ得られるものだ。
6．制裁とは軍事力に依存するものだ。（*2を参照*）

15年が過ぎた今でもなお、この平和への歩みは、我々がかつていた場所から一歩も進展していない。このようなやり方では、我々はどこへも進めはしないのだ。平和はかんぬきのされていない扉の前にあり、我々をその寺院へと導こうとしている。そして我々は抗しがたい論理とフランス人のような明快な思考で、自分自身に言うのだ。この難攻不落の壁を通って我々の道をこじあけることさえできれば、我々はあのかんぬきを外して扉を開け、中に入ることができるのだが、と。私の偉大なる平和計画は、我々は今そのかんぬきのされていない扉をただくぐって中に入ってみるべきではないかという、空想じみて子どもじみた提案なのだ。平和について決心するまでに、安全保障や武力放棄について手を煩わせる必要などないのだ。いったん平和に対して誓いを立てさえすれば、安全保障と軍事力の放棄はおのずとついてくるのだ。

ではここで老政治家によるこの私の計画への反論を見てみよう。

Ｅ．Ｓ．　*それは空想じみて、子どもじみて、不合理だ。*

名もなき戦士の埋葬も同じだ。２分間の黙とうも同じだ。老政治家が本当に言わんとしているのは、偉大なる政治家が物言わぬ者たちの命を処置する通常のやり方ではないということなのだ。実際に外交官たちは「これらのことをしない」。彼らはしはしないのだ。現に今の問題についても、彼らは何もしてはいない。

Ｅ．Ｓ．　*その誓いは、せいぜい、現在の権力者のもとに結ばれるものであり、彼らの権力もいつかは失われるものだ。*

はっきりと申し上げるが、誓いとは必要なときはいつでも新たに変更されるものだ。立憲国家では、その誓いを行わないものは公職に就くことができないという条項が憲法に含まれるだろう。非立憲国家では、独裁者が権力をつかんだとき、その政府は彼が平和への誓いをたてるまで正式に認められることはないだろう。同様に若者たちは、成人の日かそれよりも早く、それぞれに誓いをたてる必要がある。これらは非常に簡単に機能するだろう。重要なステップは最初のものだ。すなわち、名誉の回復だ。

Ｅ．Ｓ．　*軍事力の放棄については何も言っていないようだが。*

軍事力の放棄はおのずとそのあとを追うことになるだろう。国家がもはや必要もないものに何百万もの費用を費やすことなどありえないからだ。民主国家では、納税者に対して国家によるそのような浪費を認めさせることなどできないだろう。「ボールドウィンと彼が使わないと誓った空

軍に投票を」という宣伝文句がほとんど効果がないのと同様に、ほとんど理解されない訴えとなるだろう。独裁者でさえ国民の人気取りが必要だ。「我々の偉大なる祖国の不名誉のために増税を」とはムッソリーニの最も人気の高いスローガンにはならないだろう。一方で、国内の安全を保つため、あるいはヨーロッパ以外の地域にいる国民を守るための軍事力の必要性については従来のとおり扱われる。しかし他国からいかなる競争心をも引き起こす恐れがないようにしなければならない。そこで使用される軍事力は、隣国への恐怖や嫉妬によって人工的に決定される代わりに、やがてその国の本当の必要性に合わせて調整されることになるだろう。軍事力に関する問題は誓いによって成立も崩壊もしうる。崇高な誉れ高い誓いを私が示唆したような儀式で管理しようとし、そしてそれがきちんと守られているかを監視するために委員会を立ち上げるようなことは、その名誉という言葉を意味のないものにすることになるだろう。

Ｅ．Ｓ．　*国の安全保障のために何も備えないという。もし自国を守る軍備を持たないと誓った場合、どうやって他国の攻撃から国を守るというのだ。*

完全なる安全などというものはこの世界に存在しない。そしてすでに存在する安全は、必ずしも軍事力に頼る必要はないものだ。一般的な人にとって殺されることに対してもちうる最大の安全装置は、死刑ではなく、彼を殺そうという意図を持っているものはごくわずかであり、そのごくわずかな人でさえ殺人の罪を背負うのはその良心が許さないという事実なのだ。そしてもちろん殺人に対しては罰則がある。しかし飲み物を飲もうとして「意図せずに」隣の人にぶつかってしまい、グラスを倒して素敵な新しい服を汚してしまったことに対しては、罰則などない。しかしながら我々は明日もまた、防水スーツの完全なる安全を身にまとうことなく、この手の「攻撃」からはほどほどに安全に、各々のクラブでランチを取るではないか。

老政治家にこう尋ねるものがいるかもしれない。他国からの攻撃に対してあなたの国はどのような安全保障を持っているのか、と。そんなものありはしないのだ。その国が戦闘機を作って手に入れようとしているのは、敗北に対する安全なのだ。もし「安全」というものが、世界が破滅するときに下部の国家とならないことであるのなら、どうして数年来ヨーロッパは世界の破滅を回避しようと努めてきたというのだろうか。老政治家はこのように答えるかもしれない。攻撃に対する安全を与えるのは、その国がいつでも相手国を攻撃できると知らしめることだ、と。もしそれが真実であるならば、世界には歴史上戦争など起きなかったはずではないか。

現在各国に与えられている安全とは、実際の安全とは異なるものだ。それは国の名誉の安全なのだ。道徳的抑止力についてはまだ言及されていない。ここでそれについて考えてみよう。

現在まで、国の名誉というものは政治家の手に収められてきた。政治家というものは伝統的に、個人の名誉と政治上の名誉を分けて考え、国家の安全保障とはそれを達成するためのいかなる不名誉な恥ずべき手段をも正当化する目的だとみなすよう教えられてきた。その伝統というものは、誰しも不安を覚えながらも受け入れられてきた。それはアメリカで汚職が受け入れられ、英国で離婚裁判での偽証が受け入れられるのと同じだ。しかし我々は本当に願えば、その伝統から解放されることができる。離婚裁判所における男性は、ほかの点では誉れ高さを尊ぶのだが、神の前で真実を、それも完全なる真実を、真実のみを述べることを誓うにも関わらず、次の但し書きを心の中に抱いている。伝統的に、女に代わってうそをつくのは誉れ高き男の義務だ、と。しかしもし彼がこのように誓いを立てていたとしたらどうだろうか。「私は神の前で、真実を、完全なる真実を、ただ真実のみを述べることを誓います。神の御名のもとに、これまでこの法廷で名誉ある行為と考えられてきた偽証の伝統を完全に放棄する真に名誉ある男となることを誓います。」――そうすれ

ば、彼は偽証をすることが少し難しいと感じるようになるだろう。実際不可能なのだ…少なくとも新たな偽証の伝統が育つまでの数年の間は。

もし私が提案したやり方で各国が攻撃と防衛のための軍事力の放棄を厳然と誓うならば、従来では持ちえなかった尊厳をその誓いが持ちうることになる。その理由は次の３つだ。

(i)　我々のうちに宿る神は、決して降服するようなことはしない。極悪人でさえ、自身の良心に対して譲歩することを強いられる。多くの盗賊が「借りる」ことから始めるのはそのためだ。多くの殺人者が自身のロマンに満ちた世界に生き、自分の無実の主張は真に濡れ衣を着せられたものの主張であり、自分がおかした殺人は殺人ではないと思っているのだ。攻撃と防衛の両方の軍事力を放棄することへの誓いは、それを破ったものに精神的な逃げ場所など与えない。ムッソリーニが別の文脈で言ったように、彼は「死の選択肢の中で、自分自身と向かい合う」ことになる。つまり、魂の死か、名誉の男としての死か、である。確かに世界には名誉に値しないものがいる。そしてその中には、自身の活路を政治に見出すものもいる。しかし彼らが自分たちは依然として名誉ある人間だと自身に言い聞かせることに成功したとき、彼らにとって不名誉な行動をとることはずっと容易になる。

(ii)　国の指導者たちは自身をだませないだけでなく、国民も欺くことができない。現状では、いかなる政府も自分の平和的な意思を他国に表明することができる。国防のための軍備を増強しながら、攻撃的な活動はしていないと誓いをたてることができる。よその国が攻撃的な態度で軍事力を高めていたからと口実をつけて、他国に戦争をしかけることができる。そして、わずかな困難さも伴わず、攻撃についてはまったくの無実で、その攻撃は卑怯な敵国から行われたものなのだと国民を欺くことができる。しかし新しい誓いのもとでは、このようなことはもはや不可能だ。もし政治家が誓いを破ろうとしていれば、彼は自分自身だけでなく、世界中の開かれた目の前でそれをしなければならないのだ。

(iii)　もっとも恥知らずな罪人であっても、自分の罪から利益を得たいと願っている。政治家は誓約を破る覚悟があるかもしれないが、その破られた誓約は国民の支えがなければ何もなしえない。彼らは一般市民たちがもはや旗や軍楽隊や拡声器に対して従順ではないということに気づくかもしれない。その国の名誉はそのときはじめて、一般市民たちがあずかるものとなるのだ。

Ｅ．Ｓ．　*ある不誠実な国が信頼を破り別の国を攻撃するかもしれないという事実が抜けている。そうであるならば、国家が国防のための軍備を放棄することなど考えられないことだ。*

誰もそのことについて考えてこなかったから、考えられないことなのだ。火星の住人は（あるいは単純に未開の地の住人でもいいが）英国の名誉が女性と子どもの犠牲の上になりたっているなど考えもしないことだろう。戦争は今では防御しようのない殺人行為となってしまったが、職業軍人が直接殴り合っていた時代と同じ戦争観をいまだに我々が持っているなど考えられないことなのだ。1,000万の男を殺し、100万の女性と子どもを殺した戦争について16年間考えぬいた結果、いまだに新たな形の死の恐怖を作り上げようと苦心しているなど考えられないことなのだ。勝者と敗者が同様に無秩序と崩壊の淵に立たされ、征服側のひと世代と被征服側のひと世代が同様に破壊しつくされたあとにも関わらず、我々がいまだに戦争を勝利と敗北の観点で考えているなど、考えられないことなのだ。

ここではっきりとしよう。*新たな考えとして*、現代戦争など完全に考えられないものなのだ。よその世界から来た訪問者に、２人の人がサラエボで死んで、ヨーロッパができた最善の行為は、さらに1,100万人を殺すことだったと伝えてみるといい。私が８章に記したヨーロッパの戦争に関する理論を彼に読んできかせてみるといい。そして彼の上を流れる恐怖、あるいは一陣の大笑いから回復したとき、彼はいうだろう。「魂と知性を授けられた生命がこのようにふるまうなんて考えら

れないことだ」。人類は猿から退化し、100万年をかけて着実に退化しているのだと教えるまで、彼はそれを理解することができないだろう。

そのため、火星からの訪問者がその頭に、まったく考えられない「戦争の受容」を叩き込もうとしている間に、次章で我々はまったく考えられない「戦争の拒否」について頭に叩き込むことにしよう。我々が猿から退化したということを覚えておくことは、火星の彼らの理解を助けた。同様に我々が神に対して強い願いを持っていることを覚えておくことは、我々の理解を救うことになるかもしれない。

17章　戦争の拒否（Refusal of War）

1

「ある不誠実な国が」（と老政治家が言う）「信頼を破り別の国を攻撃するかもしれないという事実が抜けている。そうであるならば、国家が国防のための軍備を放棄することなど考えられないことだ。」

我々が最初に認識しなければならないのはこうだ。災害の物理的な*可能性*というものは、それ自体の中では警戒すべきものではない。それはただ、ある一定の可能性のレベルに達したときに危険なのだ。英国には殺人狂と呼ばれる人々が数名いる。もしその中のあるものが脱獄して老政治家を攻撃したとしたら、老政治家は自身を守るための拳銃を望むだろう。しかしながら、彼は拳銃の使用を放棄している。現在のところは、殺人狂はいつか脱獄して彼を攻撃するかも*しれない*という可能性でしかないのだ。

ある国が誓いを破るかも*しれない*ので、その他の国が国防のための軍備を放棄するなど考えられないというのは、意味のない議論だ。もちろん老政治家にその意味のない発言を行わせているのは、ほかならぬ私だ。しかし私はあえてこれらの言葉をここに置くことにした。なぜならば、この言葉は、従来の平和会議における一般的な思考の慣習を表すものであるからだ。つまり、政治家の決断というのはリスクを取らないものなのだ。彼らの哲学はこうなのだ。もしあるものが何かをリスクにさらすなら、それはすべてをリスクにさらすのと同じであり、つまりその人物は反逆者だ。そして愛国主義者であるならば、彼は何もリスクにさらすべきではない、と。さらに、彼らが求める安全保障とは、道徳観による安全ではなく、物理的な安全なのだ。

ここでもし読者諸兄が私的生活をこのリスクへの問いに関連づけたとしたら、彼は以下のことに気づくことだろう。

(i)　起こる*可能性がある*多くの危険に対して、彼は何であれ安全というものを探しえない。

(ii)　彼が危険に対して探し求め、そしてこれまでに得てきた安全というものは、しばしば何の意味もないものであることが証明されている。

(iii)　ある特定の危険に対しては、物理的な安全よりも、道徳観による安全のほうがより効果がある。

最初の２点については、わざわざ説明するまでもなく、容易に理解されるだろう。３点目については、あるものはこう指摘するかもしれない。力による強制によっては、牧師の午後の訪問の間、ある人の妻が靴とストッキングを脱ぐことを防ぐことはできないだろう、と。しかしあるものは道徳の力によって、この妻がストッキングを脱ぐという災難に対する安全を確保しているのだ。愚か者（または平和会議から戻ってきたばかりの政治家かもしれないが）だけが、着脱不可能なストッキングの使用を主張しているのだ。

もしヨーロッパのすべての国家が戦争の放棄を誓うのなら、いかなる国家であってもその誓いを破る準備さえできていれば、他国の意思を軍事力で（その軍事力の効果がある限り）制することができるだろう。しかしそれ自体では、それは何も意味しない。我々が考慮しなければならないのは、その誓いを破ろうとする国家があるという*見込み*なのだ。

では、英国が自分自身に偽証を行う可能性について議論しよう。王は誓いをたてた。あの誉れ高きボールドウィンは戦没者記念碑の影の中で、彼

がもつ最も神聖なものをかけて誓いをたてた。『モーニング・ポスト』の編集者は彼の村の教会の祭壇で、戦争の放棄と、以降戦争のうわさを立てないこと、戦争へと扇動しないことを誓った。そうすると何が起きるだろう。その編集者はドイツへ向けての軍事的な行動を求める扇動的な記事を書き始める。内閣は軍事動員を決定し、国王は勅令にサインをする。そして人々は喝さいするのだ。そうなりそうだろうか。最も熱狂的な愛国主義者でさえ、そんな可能性について議論することを望んでいるのだろうか。我々はそんなことなど起こらないと*知っている*のだ。

それでもなお我々は「不誠実な英国」と呼ばれている。そして不誠実な英国が切望しているのは、英国が確約されるための自らの忠誠心ではなく、他国の忠誠心なのだ。それもとりわけドイツの忠誠心なのだ。これは他国にとって、中でもドイツにとって奇妙なものに映るかもしれない。しかしここではこれを真剣にとらえ、そしてドイツが自身に対して偽証する可能性について真剣に考えてみよう。

現在ドイツについて議論するのはやや困難だ。というのも、今日のドイツは明日のドイツではないかもしれないからだ。いずれにしても、我々が今誓いを立てさせようと考えているドイツは、少なくとも今日のドイツではない。というのも誓いをたてるということは、そのドイツは(i)次の戦争が世界の破滅だと理解しているドイツであり、(ii)不満を抱いていないドイツだといえるのだ。読者諸兄には次の*順序*について思い出していただきたい（というのも重要なのはその順序なのだ）。その順序において、平和への道はたどられることになるのだ。

第1段階：普遍的平和がヨーロッパには欠かせないという認識。

第2段階：特定の要求が認められるための、平和の条件つき受容。

第3段階：要求事項の解決。

第4段階：攻撃と防衛のための軍備の完全なる放棄。

ドイツは、つまり不満を抱いていない（少なくとも見た目上満足した）ドイツであれば、第4段階に至り提示された厳粛さとともに誓いをたてるだろう。ドイツは誓いをやぶるだろうか。

私はできるのはせいぜい、ドイツは誓いをやぶらないだろうしやぶることもできないに違いないと述べるくらいだ。フランスや英国にとってそうであったのと同じ程度に、ドイツが誓いをやぶることは道徳上不可能なのだ。実際に私はフランスよりもドイツのほうが誓いをしっかりと守るものと考えている。それはフランスよりもドイツの名誉や平和への願いがフランスよりも強いからというわけではない。そうではなく、周知のとおり片方の国が他国の意見に対して敏感で、もう一方はそこまで敏感でないからなのだ。先の戦争でドイツはベルギーを侵攻してはならないという誓いをやぶったといえるだろう。ドイツはそうしたのだ。しかしフランスが先にその誓いをやぶることをすでに決めていた証拠を捏造するまで、ドイツは決して満足ではなかった。現在ドイツがもっとも憤りを感じている（そしてドイツに物質的損失以上のものをもたらしている）、平和条約の条項は、ドイツに戦争の責任を問う条項なのだ。今でさえ、ドイツが以前にも増して物理的強制力をその神としてあがめているとき、ドイツは絶え間なく、そして他国にとっては脅威的なほどに、世界各国の目の前で自身を正当化しようと努めているのだ。ムッソリーニは他国の評価など気にしていない。あるいは同様にフランスもそうだし、英国でさえ同じだ。ドイツは他国にも増して、「自身にとって正当」である必要があるのだ。

私が思い描く誓い全体の要点はこのようなものだ。それを破り、自身にとって正当でいられる国はない。個人に関しても、それを破り、自分は偽証をしたわけではないと考えられるものなどいない。攻撃のための武力のみ放棄するという誓い、他国の遵守状況次第で行われる誓い、あるいはいかなる観点であっても条件つきの誓いは完全に意味をなさないのだ。ヨーロッパ諸国は1億の死体の上に、その無意味さを証明してきたではない

か。そしてその証明の中で、「国家の名誉」を怒りに満ちた冗談にしたてあげてしまったではないか。しかしその誓いを確かなものにしよう。死の選択肢の中で、国家の良心をそれ自身と直接向い合せよう。そうすれば、「国家の名誉」はすぐに何かを意味し始めるはずだ。

（*しかしドイツが誓いを破るかもしれない。そうであるならば、国家が国防のための軍備を放棄することなど考えられないことだ。*）

私がいいたいのは、ドイツやその他の国が誓いを破るなど考えられないということだ。ドイツが誓いをやぶるなど不可能だ。「制裁」も「安全保障」も、フランスの侵攻を不可能になどしはしないのだ。制裁と安全保障がせいぜいできるのは、侵攻をより危険で、高額なものにするだけなのだ。しかし私が提案してきたやり方で誓いをたてることは、フランスの侵攻を不可能にする。しかしそれは、それを不可能にできるやり方でのみ「不可能」なのだ。つまり、道徳的な不可能さによってのみ。

私は老政治家に彼の歴史の知識よりも、想像力に頼るように促したい。諸国によって行われる、戦争を抹消するためのこの壮大な断固とした試みについて真剣に考えてみるよう促したい。この偉大な政治家たちが彼ら自身にとって最も神聖なすべてにかけて、神の御前で二度と互いに武力を使わないと誓う、その崇高なる瞬間を思い描くよう促したい。それは過去の保留事項を一切伴わずにたてられる誓いであり、過去の伝統や愛国主義の明確な放棄を伴い、その絶対的な性質のはっきりとした認識によってたてられる誓いなのだ。私は彼に、この崇高なる瞬間が世界中の映画館のスクリーンや拡声器によって声高に伝えられるのを想像するよう促したい。そして（もし可能ならば）彼に、誓いをやぶった次の日にはいかなる小さな町の映画館でも、すべての小さな家の蓄音機でも、彼の不名誉が語られることを知りながら、誓いをたて、そしてその崇高な誓いを破ってしまうもののことについて想像するように促したい。

歴史の知識は、老政治家がそのような献身性の価値を称賛する手助けにはならないだろう。彼の「誓い」という言葉に対する自動反射は、誓いというものは破られるためになされるものであり、同盟関係などというものはすぐに崩壊するものなのだという彼の極めて現実的な考え方に基づいた反射なのだ。彼にはいったん過去に行われてきた不誠実な行為を忘れてもらおう。そして非歴史的な儀式で始まる非歴史的な伝統を想像してもらうことにしよう。今日の戦争を考察するために新しい心を持ち込む必要があったように、明日の平和を考察するためにも新しい心を持ち込む必要があるのだ。

2

S．R．（共感的読者） 私の理解によると、あなたがおっしゃるその誓いの究極の価値は、その崇高さと周囲からの認知に加え、そこからの精神的な逃げ場など存在しないという絶対的な誓いであるという点にあるということですね。

M． その通りです。

S．R． つまり、もし誓いを破ってしまったのなら、それはあくまで自身の手によって誓いを破ったのであり、ほかの誰かが先に誓いを破ったなどということは言い訳にならないということですね。

M． その通りです。

S．R． 国が将来その名誉ある言葉を破らないようにする道徳的抑止力とは、そのような裏切りに伴う普遍的な非難であると？いわば文明世界全体からの非難ということですね。

M． 名誉ある人がその誓いを破らないようにする道徳的抑止力とは、彼自身の名誉です。そして不名誉な人がその誓いを破らないようにする道徳的抑止力とは、はた目には名誉が保たれたように見えることを願う彼の欲望なのです。

S．R． 私がいわんとしているのはこういうことです。真実を語る人たちの世論によって、うそつきがうそをつくことを防ぐことができるかもしれない。しかし、そのうそつきは他のうそつきたちの世論によってはうそをつくのをやめないでしょう。ある不誠実な国が古き良きやり

方で、他国は誓いを破ろうとしていると自らを信じこませ、それを自ら信じ込むことで再び軍事力に頼るようなことはありえないでしょうか？そうなってしまうと「文明世界全体からの非難」は、もはやその国と同程度に罪のある他国からの「あざけりの恐怖」程度の意味しかなくなってしまいます。もしその不誠実な国がドイツであるならば、ドイツはこう考えることで自身の良心をなだめてしまうかもしれません。「我々は国家間の名誉ある伝統を打ち立てようとしたのであるが、フランスがそうはさせなかったのだ。国家間に名誉などというものはありえず、あるいは偽善者がそのふりをしているだけなのだ。」

M.　「軍事力に頼る」のはドイツだけでしょうか？

S．R.　まずそうでしょう。もっともドイツはフランスがそれを先に始めたふりをするでしょうがね。つまり私は、今でもなおあなたがいう精神的逃げ場の可能性はあるといいたいのです。そんなものがあるべきではないというあなたの主張には賛成ですが、残念ながらあるようなのです。ヒトラーは自身と自国民に、ヨーロッパは非現実的な誓いをたてていると説得し、その事実によって、誓いから逃れられるように思われます。

この共感的読者もまた、その想像力を鍛えなければならない。軍事力に頼る楽しみのためだけに突然「軍事力に頼る」国はない。もし英国の空軍機がヨーロッパの戦争放棄からしばらくしてイタリア上空を飛び、ローマを爆撃するとしたら、そこには目的とするものがあるはずなのだ。想像するに、イタリアはその目標物について知っているはずだ。それまでにその目標物について、英国とイタリアの間に何かしらの悶着があったはずなのだ。誓いにしたがえば、そのいさかいについては調停にゆだねられなければならない。罪を犯した英国に、自分たちは誓いを守ろうとしているのにイタリアがそれを破ろうとしているのだ、と自身を説得するのは不可能だ。イタリアはただその誓いに従って調停に同意すると主張する。そうすれば、イタリアの名誉は保たれるのだ。もしそれでも英国の空軍機がローマを爆撃するのならば、英国の政治家たちが守ろうとしていた英国の名誉を、自分たち自身でさえ見出すことは不可能だろう。しかしもちろん、そのような軍事力の使用などありえないことなのである。

しかしながら、ここではそのありそうもないことについて話をしよう。あるいはむしろ、愛国主義者にとってそれほどありそうもないと思われていることについて話をしよう。ドイツが依然として武装（あるいは再武装）し、その誓いを破り、防衛能力を放棄している英国から何かを奪おうとするかもしれないという可能性だ。そのとき何が起きるだろう。

想像するに、そのとき、もしドイツがそれほどまでに差し迫ってそれを欲するのであれば、ドイツはそれを手に入れるだろう。ここで私は「それほどまでに差し迫って」といったが、それはつまり、周囲にさらされる不名誉からの、あるいは周囲の軽蔑からの逃げ道など存在しないということなのだ。もはや自分自身と世界への言い訳など通用しない。裏切りとはあまりにも悪質な行為であり、それに比べたら中立国ベルギーへの侵攻など些細なウソと同じくらい害のないものになってしまうだろう。もしドイツの必要性がそれほど差し迫っているのなら、それは平和会議において解決されることになるだろう。というのも（覚えられているだろうが）、そのすべての差し迫った必要性は、平和会議においては平和を得るための努力によって満たされることになるからだ。もしそれが後になって生じた必要性であったならば、英国にはそれを満たす準備があるはずだ。

もしそうでなければ…

そのときは、ドイツが英国に宣戦布告し、そして打ち負かしたときと同様に、それを力づくで奪い取ることになるだろう。

古い価値観の愛国主義者にとって、そのようなことは考えられないことだろう。

しかし戦争は間違っていると知る英国の紳士淑女にとっては、英国を愛し、最も偉大な美徳とは道徳的美徳であると考え、その所有物よりもその国の名誉を第一に考える、そんな多くの英国人にとって、それはありえないことではないのだ。その考えは、もはや強盗が入り、盗みを働くかもしれないと考えることよりも、ありえないことでも恐ろしいことでもないのだ。

英国は何か（それは英国人が失うことを惜しむものかもしれないが）を失うかもしれない。しかし英国は名誉を失ってはいない。というのも、物質的損失を可能にしているのは、英国が約束を守り抜いたという高潔さの表れなのだ。そして英国は誇りを失っていない。というのも、英国が苦しんでいる「敗北」とは、英国がつつましくも世界の救済のために負ったリスクだからだ。

もし英国がそのリスクを負うのであれば、私は英国を誇りに思うに違いない。私は英国が国外にある問題のために何かリスクを負うことを誇りに思うに違いない。愛国主義者であれ、ただ祖国を愛するものであれ、我々は英国を誇りに感じたいのだ。物質的所有への誇りごときで、どうすれば祖国への誇りを称賛すべき質にまで高めることができるだろう。もしその家族が何世紀もの間その所有物に侵入者が触れられないようにすること以外に何の気高さも自己犠牲も見せないような家であったならば、その家の者は自分の名を誇ることはできないだろう。何世紀もの間愛国主義者たちを魅了してきた偉大なる国々は、その支持者たちに次の程度しかインスピレーションを与えてはいない。すなわち、彼らは自己発展と自己保身以外に高い理想を語らないのだ。何もかもについて戦おうという大国の意思、そしてその大国の偉大な政治家たちが他の人々の命を犠牲にして国家の野心を追求する姿は、これまでふんだんに、絶え間なく示されてきたため、今ではそれが当たり前のように考えられているのだ。もしそんなものが美徳であるのならば、誰も英国の美徳を否定しないだろう。もし英国が新しい美徳を探すなら、もし英国が平和と世界を守るために犠牲を負うのなら、声高に愛国心を叫ぶ人々の数倍の、物言わぬ一千もの紳士淑女たちが、言葉にするにはあまりにも深いその誇りに、心の中でじっくりと感じ入ることだろう。

3

そのため、私はこの章の冒頭を、段落ごとこのように書き直そう。

前提として、*ある不誠実な国が誓いを破り、他国を攻撃するなど考えられないことだ。たとえそうでなかったとしても、国々はそのリスクを負うべきだ。国家のものよりもさらに高次の目的、すなわち人類の目的のために。*

前提として、ヨーロッパは平和を求めている。

ヨーロッパの人々は確かに平和を求めている。彼らはほかに何も欲してこなかったのだ。

そして前提として、ヨーロッパの独裁者たちは平和を求めている。

15章で私が述べた通り、ヨーロッパの平和とは彼らの手にゆだねられているのだ。

18章 「女性と子どもたちを第一に」（Women and Children First）

今一度、ここで、私はヨーロッパの偉大なる人物たちに、さも私の知人であるかのように語り掛けたい。つまりその人物たちとは、知性があり、人間性があり、名誉を持つ人物たちのことだ。

みなさん、ヨーロッパの平和は皆さんの手にゆだねられています。

かつて皆さんの中のひとりが、戦争が国家に高貴の印を押すのだといって、永遠の平和という考えを放棄したのだといいました。しかしながら、次の戦争が前の戦争ほどにも、あるいは現在行われている戦争がボリビアとパラグアイの上に押される高貴さほどにも、イタリアという国に高貴の印を押すことになるとは思えません。英国では「高い身分に伴う義務」という言葉があります。つまり我々は高貴さを義務だと考えているのです。次の戦争が与えることになる高貴さはあなたがたに、あなたがたの信条のために、幾千の女性

と子どもを犠牲にすることになります。英国にはこのような言葉もあります。「女性と子どもを第一に」、つまり彼らが最初に守られるべきだという意味です。あなたがたの新たに見出した高貴さの紋章の下に、あなた方も「女性と子どもを第一に」と書き加えるかもしれません。しかしそれは、彼らが最初に犠牲になるべきだという意味ではないでしょうか。

私はみなさんにこう考えてほしいのです。古い戦争では、あなた方の国の男たちは、他国の男たちと戦い、殺そうとし、そして戦いの中で殺されるリスクを負っていました。次の戦争では、女性たちが防御しようのない死にさらされることになります。そしてあなた方の国の男たちは、戦うのではなく、あらゆる恐怖の中、無防備な女性や子どもを殺すように強いられることになるのです。そのような行為は、みなさんやみなさんの国民に高貴の印を押すでしょうか。最たるロマンス映画の中でさえ（こう述べることをお許しいただけるなら、皆さんはときおりその世界に生きておられるように見えるのです）、包囲された小屋の中でアメリカ人の主人公はヒロインを流れ弾に当たる危険にさらすくらいなら自ら投降するものです。イタリアのローマの主人公に、イタリアの女性を負傷や死にさらすくらいなら自身の野望を差し出すように求めるのは難しいのでしょうか。

今一度、私はみなさんに、それを通して戦争を見ているその神秘主義のベールを切り裂いていただきたいのです。そして戦争そのものをありのままに見てほしいのです。長年みなさんが戦争と関連付けて使ってきた言葉、「勝利」「敗北」「賠償」「非戦闘員たち」、これらの言葉は今や意味を失っています。戦争という言葉がその意味を失ったのと同じことです。もはやこんなものは戦争ではありません。これはもはや、言葉では言い表すことができないようなものになってしまっています。それがボクシングの試合と異なるのと同じくらい、ナポレオン戦争とも異なるものになっています。みなさんが放棄するように求められているこの新しいものとは、野獣を太らせる堕落、精神病院を辱める狂気なのです。みなさんがその放棄を受け入れたとしても、みなさんは歴史が受け入れてきた、詩人が歌ったものを何一つ放棄することにはなりません。みなさんの国々が利得を覚え、国民が栄誉を感じるものを何一つ失うことにはなりません。

みなさん、そしてみなさんと同様の人々が平和を求めて15年を費やしてきました。しかしそのゴールに向けては一歩も進展していません。実際、みなさんの平和の追求は、むしろ戦争へと向かっているという人もいるほどです。安全保障に関する議論が上がるたびに、ヨーロッパの国々に新たな不安が生まれるという人がいます。そして軍事力の放棄についての議論は、単に賛同を得られず新たに却下された項目を生み出しているだけだという人がいます。そこで、ここで再び、みなさんは平和を求めるかどうかお尋ねしたいのです。もしあなたの狙いが（時としてそうなのですが）戦争の概念と平和の状況を１つに束ねようということなら、こうなる以外に我々に希望はありません。つまり、みなさんが確かに打ち立てるだろう戦争の状況下で、我々が平和の概念を維持できるかもしれないということです。というのも皆さんが亡くなり、不名誉の烙印を押されたあとに、世界に残ったものがそれを再度試みることができるためです。これは大きな希望とはいえません。しかしこれまでみなさんが私たちに許してきたすべてなのです。

もし平和を求めるのなら、みなさんは戦争という*概念*を放棄しなければなりません。もしそうすれば、あとは平和への道は容易なものです。そして大多数の国民たちは、感謝してみなさんについてゆくことでしょう。

権威をもって言われてきたことには、「次の戦争は文明の終わりを意味する」といいます。そして権威をもって言われてきたことには、「次の戦争の戦闘は、男性だけでなく、各国の女性や子どもを巻き込むことになる」といいます。これらの言説が本当なのかどうかを議論することは、フランスが安全かどうかを議論することよりも重要で

はないのでしょうか。もしこれらの言葉が本当であるなら、軍備の文脈でフランスの「安全」について議論するのは無駄なことです。なぜなら、世界の安全は軍事力の使用の放棄にかかっているのですから。

今一度ここでその証明をさせてください。

今朝の郵便で私は最近新たに組織された団体からの回報を受け取りました。「イギリスに手を出すな、空中防衛同盟」[19] という団体からです。その中ではこう太字で叫ばれていました。

なぜ爆弾兵が4時にベルリンを発ち、8時にロンドンを破壊するのを待っているのだ？

そして愛国主義者愛読の「ボーイズ・オウン・ペーパー」の調子でこう続けてありました。

いまだ巣にいる他国のスズメバチを撃破するために、新たな長距離イギリス爆撃機の部隊を組織せよ。

同様に他国にも愛国主義者がいます。そして間違いなく、「ドイツに手を出すな：空中防衛同盟」も「フランスに手を出すな：空中防衛同盟」も「イタリアに手を出すな：空中防衛同盟」もあるはずなのです。そして間違いなく、それらの団体は「なぜ爆弾兵が4時にロンドン（ローマ、パリ）をたち、ベルリン（パリ、ローマ）を破壊するのを…」と叫んでいるに違いありません。そして間違いなく、彼らは自国の愛国主義者たちにいまだ巣にいる他国のスズメバチを撃破するために、新たな長距離のドイツ（イタリア、フランス）爆撃機の部隊を組織するよう駆り立てているのです。これが、みなさんが平和への議論の間にヨーロッパにもたらした状況なのです。これが、みなさんが我々に与えてくれた安全保障と呼ばれるものなのです。

ではなぜ誰も手をかけていないというのに、みな「イギリスに手を出すな」と叫んでいるのでしょうか。なぜ、他国と言い争う深刻な原因がないのに、英国人は「他国のスズメバチが巣にいる間に撃破する」ように誘われているのでしょう。答えは簡単です。新たな戦争では防御はなく、攻撃しかないからなのです。そしてその攻撃は敵に先んじなければならないからなのです。ロンドンが4時にベルリンをたった爆撃兵によって8時に「破壊」されないためには、11時にロンドンを発った爆撃兵によってベルリンは3時に「爆破」されなければなりません。そして11時にロンドンを発った爆撃兵に対するドイツの防御とは、ベルリンを6時に発ち10時に「彼らを爆破する」ことなのです…そして同じことが延々と繰り返されます。他国の愛国主義者が先に行動を起こしてはいけないと、愛国主義者たちがパニックに陥るのは驚くべきことでしょうか。新しい戦争が起こるのは、他の理由ではなく、国々がその訪れを恐れているからであることは避けられないのでしょうか。そうであるならば、「戦争を終わらせるための戦争」どころか、それは平和の不確かさへの恐れを終わらせるための戦争ではありませんか。

その戦争を阻止する方法がひとつだけあります。それが戦争の放棄なのです。私はその戦争放棄が現実のものとなるための手段を提案してきました。みなさんはそれを「不可能だ」ということでしょう。我々が不可能だというとき、それはつまり、自分の経験上そんなことは一度も起きなかったことを意味します。経験上、戦争の放棄など一度もありません。それゆえ、いかなる効果的な手段も、我々がそれを試みるまでは不可能なのです。

おそらくあまりにも楽観的に、私はあなた方の知性と人間性と名誉を想定してきました。あなた方の想像力も信じることができたらと思います。残念ながら、フランスが自身に誇る「現実主義」がみなさんを支配しているのではないでしょうか。みなさんは今や現実主義者です。それはつまり、ありもしない現実の中を生きておられるという意味です。想像力が鍛えられていない世界、昨日起きなかったことが明日起こることはない世界を生きておられるのです。しかし過去と現在の経験と知識から、次の戦争について確かな2つの事実があります。それであればみなさんの現実的な感情にも届くはずです。

1．良好な状態で先の戦争に突入した経済的な生

活がかろうじてその戦争を生き抜いたとしても、現在の最悪な状況で次の戦争に突入したら生き延びることはできないでしょう。

２．次の戦争は空爆が中心となり、女性や子どもも犠牲になるでしょう。女性や子どもたちは無防備で、攻撃をするということは、敵国の女性や子どもを巻き込むことを意味するのです。

次の平和会議はこの２つの事実について深くご理解いただき、互いにその理解を認め合ってから始めていただきたいのです。

そして次に、みなさんの人間性のすべてを示して、そのような戦争は二度とないと決めていただきたいのです。みなさんの知性をすべてかけて、戦争を避けるゆいいつの道は戦争の放棄だと気付いていただきたいのです。そしてすべての名誉をかけて、その放棄の誓いをたてていただきたいのです。

最後に、私はみなさんに、この次の戦争の大虐殺を通して、最も守られるべき命がみなさんご自身のものであるということを、恥をもって思い出していただきたいのです。いかなる女性や子どもたちよりも先に、ラムジー氏、マクドナルド氏、ドゥメルグ氏、ヒトラー氏、そしてムッソリーニ氏の命が優先されるということを。

[訳注]

1　執筆当時ボリビアとパラグアイの間で行われたチャコ戦争（1932-1938）のこと。

2　1914年６月28日に起きたサラエボ事件。ボスニアのサラエボで起きたオーストリア＝ハンガリーの皇太子夫妻の暗殺事件で、第一次大戦勃発の直接の引き金となった。

3　Alfred Tennyson の詩 “Sir Galahad”（1842）からの引用。Galahad はアーサー王伝説の登場人物で、Tennyson の詩ではその騎士道精神が謳われている。

4　原文は “Ten Power Standard”。当時イギリス海軍は二国標準主義（Two-Power Standard）を取っており、それをもじったもの。イギリス海軍は、他の列強二国の海軍の軍事力を合計したものと最低でも同等、あるいはそれ以上の軍事力を保持しなければならないというものだった。

5　３章４節のことで、「国家が名誉について語ることなど、コレラ菌やバスマットや九九の一覧表がその名誉について語るのと同じことなのだ」（「A. A. ミルン『名誉ある平和』＜１＞」81）と言及されている。

6　日露戦争（1904-1905）のこと。

7　本来はキリスト教用語で、「ヨハネの黙示録」で語られる善と悪の最終戦争のこと。大戦当時はしばしば世界に破滅をもたらす最終戦争の意味で用いられた。

8　古代ローマ市民が平和時に着用した公民服のこと。

9　イギリスの少年向け新聞。

10　戦争の比喩と思われる。崩壊しかけの断崖絶壁は次の戦争の危機にある現在の状況、ちっぽけなレスリングの試合とは国家間で生じる小さな争い、1,000トンの岩の崩落は世界の破滅を暗示している。

11　Ferdinand Foch（1851-1929）。フランスの軍人。

12　原文 “good faith”。15・16章における重要なキーワードであるが、本書では「信頼」「誠意」「善意」等、場面によってやや違う意味で使われている。ここではそれらを包括する言葉として「忠誠」及び「忠誠心」と訳す。そして対義語の “bad faith” は「背信」「背信行為」と訳す。

13　オックスフォード・ユニオン（Oxford Union）はオックスフォード大学の学生による弁論団体のこと。ここで言及されているのは、1933年に同団体によって出された “King and Country Debate” での以下の提言についてである ――“This House would not in any circumstances fight for King and Country”（“Debating”）。

14　Samuel Johnson（1709-1784）、イギリスの文学者。ここで引用されているのは彼が1775年に主張したもので、愛国主義を叫べば犯罪が許され、国や政府を批判したものは反逆者とされることを批判している（Patel）。

15　Horatio Bottomley（1860-1933）。実業家、政治家、ジャーナリスト、新聞社の経営を行った人物。

16　原文は “human nature being what it is”。ここでミルンが自己引用しているのは、11章において行った「人間の本質」に関する議論である。ミルンはここで、軍国主義者は戦争を放棄できない理由づけとして習慣的にこの表現を用いると指摘している（「A. A. ミルン『名誉ある平和』＜３＞」121）。

17　Hindenburg（1847-1934）。ドイツの軍人、政治家。本書執筆当時のドイツ大統領。

18　ここから以下では、前頁において提案された条項に関する議論が行われる。それぞれの番号は、前出の提案に振られた番号に対応している。

19　Hands off Britain Air Defence League。1934年に発足された団体で、ミルンが言及するパンフレットは当時実際に配布されていた。そのパンフレットにはミルンが引用した通り “Why Wait for a bomber to leave

Berlin at 4 o'clock and wipe out London at 8?” という文言が記されている（Holman）。

引用文献

“Debating”. *The Oxford Union*. The Oxford Union, n.d. Web. 30 Jun. 2023.

Holman, Brett. “England awake!”. *Airminded*. N.p., 5 Jun. 2007. Web. 30 Jun. 2023.

Milne, A. A. *It’s Too Late Now: the Autobiography of a Writer*. London: Methuen, 1939.

------. *Peace with Honour*. London: Methuen, 1934.

------. “War with Honour”. London: Macmillan, 1940.

Patel, Aakar. “'Patriotism Is Last Refuge Of Scoundrel.' Just Look At United States And India”. *Outlook*. Outlook, 27 Oct. 2019. Web. 30 Jun. 2023.

Thwaite, Ann. *A. A. Milne: the Man Behind Winnie-the-Pooh*. New York: Random House, 1990.

吉村圭.「A. A. ミルン『名誉ある戦争』」『鹿児島女子短期大学紀要』54（2018）：139-151.

------.「A. A. ミルン『名誉ある平和』＜1＞」『鹿児島女子短期大学紀要』56（2019）：75-86.

------.「A. A. ミルン『名誉ある平和』＜3＞」『鹿児島女子短期大学紀要』58（2021）：113-126.

------.「A. A. ミルン『名誉ある平和』＜4＞」『九州女子大学学術情報センター研究紀要』 5 （2022）：33-42.

------.「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』：AA ミルンが描いた大戦前夜」『比較文化研究』114（2014）：281-294.